# Ⅵ章　K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 14 d 層出土の土器群の特徴と編年的位置

磯部俊晴

## Ⅵ-1　K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 14 d 層出土の土器群の特徴

### 1-1．分析対象

K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 14 d 層出土土器のうち、遺構内出土・遺構外出土を合わせ、破片が微小で不明なものを除いた口縁部資料と壺形土器の胴部破片 2 点を加えた 200 個体を対象にした。報告書においては、14 d 層出土の土器を第 1 群土器・第 2 群土器に分類しているが、ここでは 14 d 層出土の土器を一時期のものとして扱う。ただし、PIT 56 出土の個体（報告書の図 185-25）は、口縁部上半部に屈曲部があり口唇部にかけて外反する器形で、その屈曲部に数条の平行沈線が施されており、明らかに恵山式土器であることから除外してある。出土した PIT 56 の遺構は、覆土の一部が人為的に埋められた可能性がある。

### 1-2．土器群の特徴

器種は、およそ深鉢が 70%、浅鉢 30%、鉢、壺は 1 %ずつである。輪積痕が確認できたのは 9 個体で、そのうち深鉢においては 6 個体が内傾接合（土器の外面側が高く内面側が低い接合面を呈するもの）で 1 個体が外傾接合であり、浅鉢においては 2 個体が内傾接合であった。内面調整は、すべての器種において、ナデ痕が観察されるものはほとんどが水平方向であり、垂直方向のナデの後に水平方向のナデがなされているもの、指頭圧痕が加わるものもある。深鉢・鉢・浅鉢の器形は、胴部あるいは胴部から口縁部にかけてわずかにふくらみを持つもので、屈曲部などは無い単純な器形である。また、深鉢において波状口縁、口唇上の突起をもつものは少なく、その中で突起や波頂部から隆帯が口縁部に垂下するものがある（図 1-1、2）。浅鉢のおよそ 4 割は波状口縁か口唇上に突起を持つ器形である。突起の種類は、山形（図 2-21）、台形（図 2-20）、波状口縁の波頂部の上面観が丸く肥厚しているもの（図 2-22）が多い。山形、台形の突起はほとんどが 1 つで 1 単位を構成しているが 2 つ 1 組のものもある。ほとんどの個体の胎土には 1 ～ 4 mm の角張った砂粒を多く含み、6 割の個体に繊維を含む。素地作りの段階で意図的に砂粒を混和したと考えられる。

外面については、深鉢の約半分の個体において口縁部に文様が施されるが、浅鉢の外面に文様が施されるのはおよそ 7 %である。深鉢において外面に文様が施文されないもののおよそ 75%には地文の縄文が施され、ほかは無文である。地文の縄文は節の大きさが条に沿って 10 mm の間に 4 ～ 6 個の割合である。縄文原体は、RL が 6 割、LR が 4 割である。水平•垂直方向の回転施文で条が斜走するものが多く、斜め方向の回転施文で条が縦走あるいは横走するものは少ない。地文の条痕は、幅 1 mm ほどで真っ直ぐ平行であるため、櫛歯状の工具によるものと考えられる。深鉢の外面の文様には、文様要素として縄文原体の側面圧痕、沈線、刺突文がある。縄文原体の側面圧痕は、地文の縄文原体と同じものを使用していると思われる。沈線は、ほとんどが幅 4 mm 深さ 1 mm ほどで沈線内部に施文工具を引きずった痕であると思われる無数の筋が残る。棒状工具か半截竹管状工具の背で引いたと思われる。刺突文は、径が 3 ～ 5 mm で、円形刺突文は縄文原体の端部によるものと棒状工具を器面に垂直に刺突したものがあり、爪形刺突文は棒状工具か半截竹管状工具を器面に対して斜めに刺突したものである。これらの文様要素を使用して外面口縁部に描かれる文様には、縄文原体による側面圧痕によって数条平行にめぐらす平行縄線文（種市 1983）のもの（図 1-3）、沈線を数条平行にめぐらす平行沈線文（種市 1983）のもの（図 1-8、9、10、11）、刺突列がめぐるもの（図 1-4）、沈線による括弧状の文様と縦横の短沈線が組み合わさった円弧文（種市 1983）のもの（図 1-5、6、7）、上下端を刺突列で区画した無文帯のもの（図 1-13）、また上下端を刺突列で区画した無文帯が口縁部の文様を 2 段に分けるものがある。このうち、無文帯の幅が 30 mm ほどになるものは無文帯部分の器壁がわずかに内側に張り出しており、成形の段階で無文帯を想定していたと考えられる。これらは無文帯を挟んで上下の文様帯に地文の条痕を施し、無文帯を刺突列で区画、地文の上に円弧文が 2 段施される（図 1-14、図 2-18）。また、胎土に 3 ～ 5 mm の白い角張った砂粒を非常に多く含み、破片が白っぽく見える特徴がある。無文帯の幅が 10 mm ほどで、その刺突

列で上下端を区画しただけのもの(図 1-13)、口縁部の文様を 2 段に分けるものは、無文帯部分の器壁が内側に張り出すことは無く、地文を施した後に、無文帯、無文帯の上下端を区画する刺突列、無文帯の上下に文様（円弧文や平行沈線文）が施される（図 1-12、図 2-19)。円弧文は必ず地文の条痕の上に施され（図 1-5、 6 、 7 、12、14、図 2-18)、わずかに無文地に施される場合もある。その他の文様はほとんどが縄文地の上に施され、わずかに無文地に施される場合もある。浅鉢においては、外面に施文される文様は口縁部の 1 条の横走する沈線のみである。外面に文様が施されないものの半分には地文の縄文が施され、残りの半分は無文である。地文の縄文は節の大きさが条に沿って 10 mm の間に 4 〜 6 個の割合である。縄文原体は、RL がほとんどで LR は少ない。水平・垂直方向の回転施文で条が斜走するものが多く、斜め方向の回転施文で条が縦走あるいは横走するものは少ない。

器種に関わり無く、口唇上の施文は内面調整、外面の施文の後になされ、口唇上にキザミが加えられているものはほとんどが内外面に迫り出している。外面の文様の上端にかかっているものもある。また、二本指で口唇部を作出したために口唇部直下の外面の地文が帯状に消えているものや、内面から口唇部を折り少し外側に突出して外面の地文や口縁部の文様の上端に被さるものが数個体あり、口唇部施文のために内面調整、外面施文の後の段階で口唇面を作出していることが窺えるものもある。口唇上には、縄文原体の回転施文や側面圧痕、棒状工具か縄文原体の側面圧痕によるキザミ、棒状工具か縄端による刺突などによって文様が施される。口唇上の文様は、①「縄文原体を回転施文するもの」(図 1-16)、②「口唇に沿って縄文原体の側面圧痕を数条施しその後外端にキザミを加えるもの」(図 1-14、19、15、図 2-18)、③「キザミを加えるもの」(図 1-3)、④「内端・外端にキザミを加えるもの」(図 1-17)、⑤「刺突を施すもの」(図 1-4)、がある。このうち施文するために口唇上に平面が必要な前 2 者は、口唇部断面形が内削ぎ状で平面が作出されているものに施されるものがほとんどで、後 3 者および施文されない個体の口唇部断面形は、内削ぎ状で平面が作出されているものが半分、残り半分の口唇部断面形は丸みを帯びるか、やや口唇上が平らで丸みを帯びる形である。結果として全体的に口唇部断面形が内削ぎ状で平面が作出されているものが多い。口唇上の文様の種類はバラエティに富んで選択され、外面の文様とは関係がないことが多いが、外面の文様が平行な数条の縄文原体の側面圧痕の場合、ほとんどが口唇上には③「キザミを加える」を選択し（図 1-3)、地文として水平方向の後に垂直方向の条痕を施した上に円弧文を施す場合は、ほとんどが口唇上には②「口唇に沿って縄文原体の側面圧痕を数条施しその後外端にキザミを加える」を選択する（図 1-5、14、図 2-18)、という特徴がある。浅鉢においては、波頂部あるいは口唇上の突起の左右で口唇上の文様が異なるものも存在する。

土器の使用の状況は、火にかけた痕跡として外面のスス、吹きこぼれのコゲ、内面のコゲなどの炭化物付着があるものが器種・外面の文様に関わり無く、全体の 2 割ほど見られる。また、外面に赤彩の痕跡が残り、煮炊きなどに使用しなかったと思われるものが 2 個体あり、外面が地文の縄文のみの個体と円弧文の個体の 1 個体ずつであるが、同じ文様のもので火にかけて使用した痕跡が残るものがあり、外面の文様によって使い分けた可能性は少ない。

以上の特徴が、K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 14 d 層出土の土器群において主体的であるが、異質な個体が 4 個体ある。以下、異質性を中心に述べる。深鉢の（図 2-25、26）は口縁部上部の無文帯部分が内側に屈曲する器形である。無文帯直下の平行沈線の一番上の沈線上に瘤が並ぶという文様要素がある。(図 2-25)の胎土には 1 〜 4 mm の角張った砂粒を多く含み、繊維も含まれる。内面には水平方向のナデの調整痕が残る。外面は、器壁が内側にわずかに屈曲する口縁部上半を無文帯とし、口唇直下から 2 条平行沈線を施す。口縁部下半の上端には瘤状の隆起を予め一列等間隔に作出し、その後、口縁部下半に地文の縄文を回転施文し、瘤間およびその下位に平行沈線を 3 条施している。地文の縄文は、条に沿って 10 mm の間に節が 6 個の割合で並び、沈線は幅 4 mm 深さ 1 mm ほどで内部に筋が残る。口唇部断面形は内削状で、口唇上に縄文原体による回転施文がなされる。(図 2-26)の胎土にも 1 〜 4 mm の角張った砂粒を多く含み、繊維も含まれる。内面には水平方向のナデの調整痕が残る。屈曲部の外面を無文帯にし、無文帯の上下端に瘤状の隆起を等間隔に作出し、その後地文の縄文を回転施文し、無文帯下端の瘤間およびその下位に平行沈線を施す。さらに、無文帯上下端を爪形刺突列で区画する。地文の縄文は、条に沿って 10 mm の間に節が 6 個の割合で並び、沈線は幅 4 mm 深さ 1 mm ほどで内部に筋が残る。刺突文の径は 4 mm ほどで棒状工具を器面に対して斜めに刺突することで爪形を呈している。口唇部断面形は内削状で、口唇上に縄文原体による回転施文がなされる。また、浅鉢の（図 2-27）には口縁部の内外面に平行沈線文を施す特徴がある。(図 2-27)の胎土にも

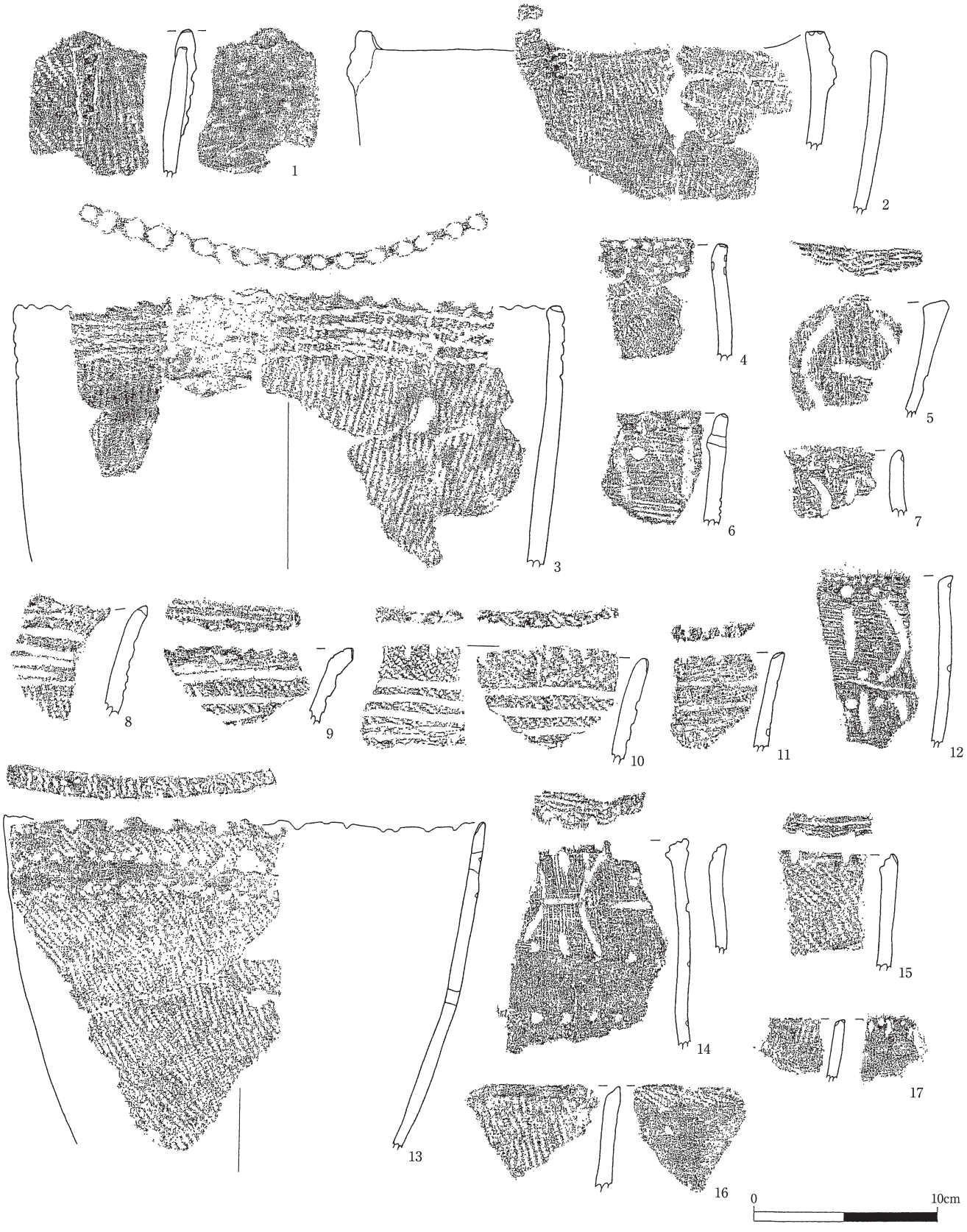



図 I　K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 I4 d 層出土土器(I)

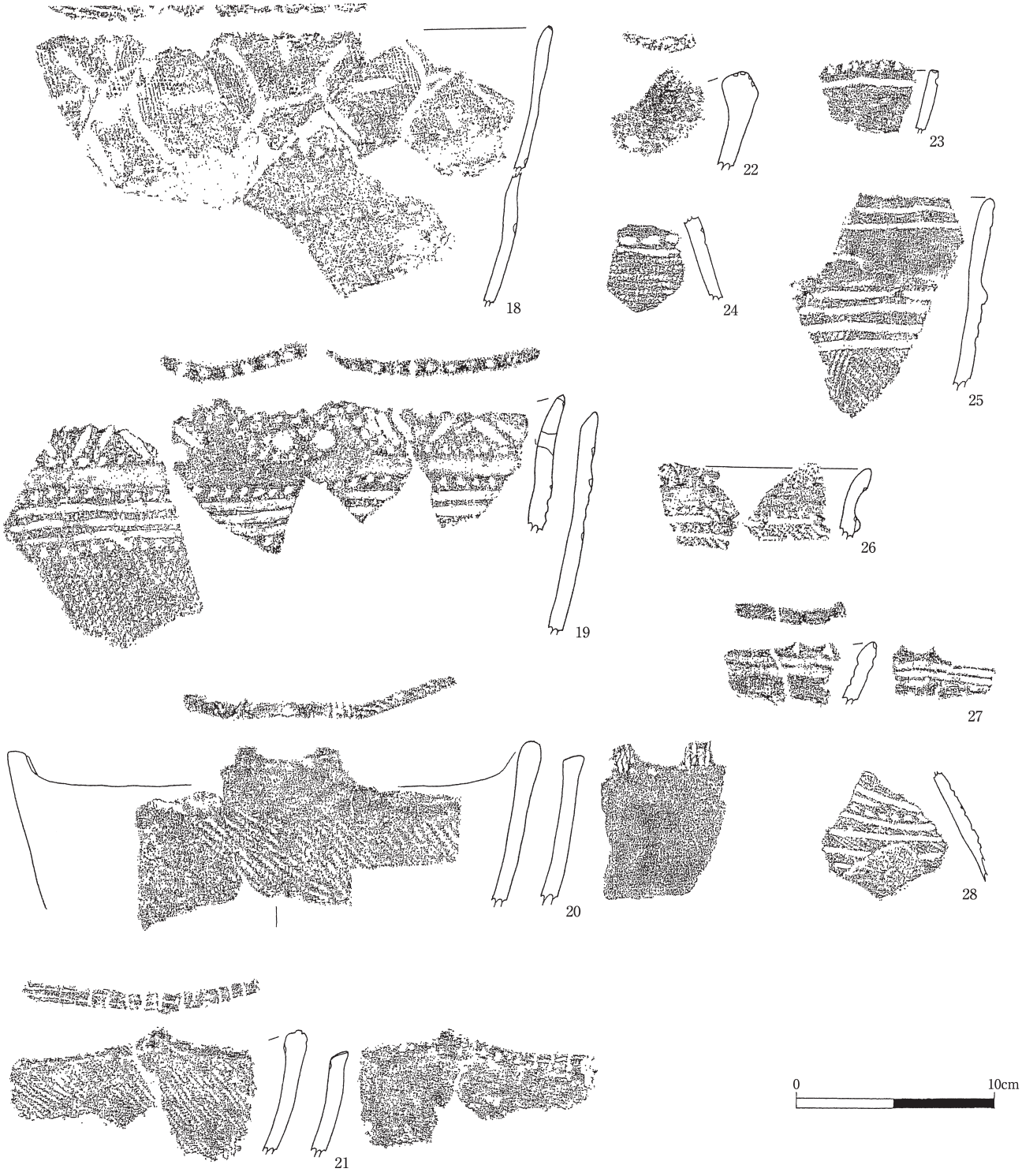



図 2　K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 I 4 d 層出土土器(2)

1～4 mm の角張った砂粒を多く含む。口縁部の内外面に平行沈線文を施し、口唇上には高さ 4 mm ほどの山形の突起が 2 つ 1 組でM字状を呈し、突起部外面には三叉状のキザミがそれぞれ施される。沈線は幅 4 mm 深さ 1 mm ほどで内部に筋が残る。

また、壺の（図 2-28）は、胎土には 1～3 mm の砂粒が含まれるが少ない。内面は非常に平滑に調整されていて、ミガキが施されている可能性がある。外面の文様は、地文の縄文を施した後に、平行沈線を数条施し、破片の上部は入組文状になっていると思われる。入組文と平行沈線の間には、刺突列が施されている。縄文は、回転施文されたものを観察すると節の大きさが条に沿って 10 mm の間に 8 個の割合で、14 d 層出土の土器群で主体的な他の個体のものよりも細かい。沈線は、幅 2～3 mm 深さ 1 mm ほどであり、14 d 層出土の土器群で主体的な他の個体のものと比較して細く深い。また、沈線内部に筋は残らない、という特徴がある。刺突文は、沈線を施文したものと同じ工具を器面に対して寝かして施したものである。

以上の K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 14 d 層出土の土器群が、駒里下層式（石川 1979）にほぼ相当すると考え、以下で研究史と該期の土器群の内容を捉えなおすことで考察する。

## Ⅵ-2　K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 14 d 層出土の土器群の編年的位置について

### 2-1. 道央部における縄文晩期後葉の土器群についての研究史

北海道における亀ヶ岡式土器の大まかな存在と分布について見解が論じられる中で、1960 年代から北海道の在地の土器を明らかにしようとする動きが表れ、土器型式の設定が盛んにされるようになる。長沼町のタンネトウ遺跡の発掘調査の成果をもとに縄文晩期後葉の道央部の土器型式としてタンネトウＬ式が設定され資料が一部公表された（野村・愛下 1962）。そして道央部の晩期後葉の土器は漠然とタンネトウＬ式と称されるようになった。1965 年に吉崎昌一によって北海道の縄文晩期の編年の骨格が示された。道央部においては浜中大曲式（積丹半島地域）→タンネトウＬ式→大狩部式、道東部においてはヌサマイ式→緑ヶ岡式という変遷がたどれ、東北地方北部の大洞Ａ式に、道南部の日ノ浜式、道央部のタンネトウＬ式、道東部のヌサマイ式が併行するとした（吉崎 1965）（表 1）。

一方、千歳市周辺の遺跡では、縄文晩期後葉の地層の中に樽前ｃ降下火山灰層（以下 Ta-c 層と呼称）が挟まれることが知られていた。千歳市の駒里遺跡の報告書では Ta-c 層を挟んだ上層と下層から大洞Ａ式に併行する土器群が出土したとして、それぞれ駒里下層式・駒里上層式と設定された（石川 1979）。同じく千歳市の美々 4 遺跡でも Ta-c 層の上下（下層がⅠＢ層、上層がⅡＢ層）からタンネトウＬ式を中心とする土器群（Ⅴ群ｃ類）が出土するとした（森田 1977）。

1977 年には野村崇によってタンネトウＬ式の標識遺跡である長沼町のタンネトウ遺跡の報告書が出され、この中でタンネトウＬ式土器の編年について述べられている。Ta-c 層を挟んだ下層の土器群として、駒里下層の土器群・美々 4 ⅡＢ層の土器群・柏木川（高橋編 1971）、上層の土器群として、駒里上層の土器群・美々 4 ⅠＢ層の土器群があり、タンネトウＡ発掘区の土器群は後者とほぼ同じ時期だとしている。しかし、このように Ta-c 層を挟んでのそれぞれの土器群に時間的な差があるとしながらも一土器型式の中に含まれるほどの差であるとして、東北地方北部の大洞Ａ式・道南部の日ノ浜式に併行する土器型式が Ta-c 層を挟んだ上下層の土器群であり、タンネトウＬ式だとしている（野村 1977）（表 1）。同年に加藤邦雄も道央部の縄文晩期後葉から終末の土器編年について述べている。Ta-c 層を挟んだ上下層の土器群については野村（1977）の考えと一致している。また、道央部の縄文晩期後葉の土器群が安易にタンネトウＬ式と一括して処理されがちな現状に対して詳細な分類の必要を説いた（加藤 1977）（表 1）。

1981 年に林謙作は『縄文土器大成』の中で北海道の縄文晩期後葉の編年を示し、道南の日ノ浜式に道央のタンネトウＬ式・道東のヌサマイ式が併行するとし、さらにタンネトウＬ式とヌサマイ式の間には器種組成・装飾モティーフが共通していることから同一型式であるとした。タンネトウＬ式の中でも Ta-c 層を境とする層位的な資料（千歳市駒里遺跡など）があるが、器種組成に大きな変化がないことから一型式内での新古だとしている（林 1981）（表 1）。

対して大沼忠春が全道的な縄文晩期の編年をまとめた中の縄文晩期終末の編年では、大洞Ａ式期には道央部で Ta-c 層で上下区分され、Ta-c 層の下層が駒里下層式、上層がタンネトウＬ式とし、タンネトウＬ式を Ta-c 層の上層に限定した。駒里下層式は道南の日ノ浜式（聖山Ⅰ・Ⅱ式）・道東のヌサマイ式が併行関係にあると、道央のタ

表Ⅰ　北海道の縄文晩期後葉の土器編年

吉崎（1965）より作成

| | 道南 | 道央 | 道東 |
|---|---|---|---|
| 大洞$C_2$式 | | 浜中大曲式 | |
| 大洞A式 | 日ノ浜式 | タンネトウL式 | ヌサマイ式 |
| 続縄文初頭 | | 大狩部式 | 緑ヶ岡式 |

野村（1977）より作成

| | 道南 | 石狩低地帯 | |
|---|---|---|---|
| 大洞A式 | 日ノ浜式 | 駒里下層　美々４ⅡB　柏木川 | ← Ta-c 層 |
| | | 駒里上層　美々４ＩB　タンネトウA発掘区 | |

加藤（1977）より作成

| 道央 | 道東 | |
|---|---|---|
| 駒里下層　美々4ⅡB　柏木川 | ヌサマイ式 | ← Ta-c 層 |
| 駒里上層　美々4ＩB　タンネトウA発掘区 | | |
| T 210 | 緑ヶ岡式（古段階） | |
| 氷川　大狩部 | 緑ヶ岡式（新段階） | |

（道央部は遺跡名）

林（1981）より作成

| 東北地方北部 | 道南 | 道央 | 道東 |
|---|---|---|---|
| 大洞$C_2$式 | | 浜中大曲式 | |
| （＋） | 日ノ浜式 | ヌサマイ＝タンネトウL式 | |
| 大洞A式 | | 大狩部式 | 緑ヶ岡式 |
| 大洞A´式 | | 氷川遺跡 | |
| 砂沢式 | | | |

（（＋）は未命名の土器型式とするもの）

大沼（1986）より作成

| | 道南 | 道央 | 道東 | |
|---|---|---|---|---|
| 大洞$C_2$式 | （札苅Ⅰ・Ⅱ群　目吉１） | 浜中大曲式 | （内藤） | |
| 大洞A式 | 聖山Ⅰ・Ⅱ式〔日ノ浜式〕 | 駒里下層式 | ヌサマイ式 | ← Ta-c 層（道央） |
| | （湯の里６　尾白内Ⅰ群） | タンネトウL式 | 緑ヶ岡式 | |
| 大洞A´式 | （知内町） | （氷川） | | |
| 続縄文初頭 | 兜野式 | 大狩部式 | 興津式 | |

（（　）は土器型式設定されていないが該期の土器を出土する遺跡）

種市（1983）　中田（1987）より作成

| 種市（1983） | 中田（1987） | |
|---|---|---|
| Ⅰ群 | １類　—　聖山Ⅰ式 | |
| Ⅱ群　—　ヌサマイ式 | ２類　—　聖山Ⅱ式 | ← Ta-c 層 |
| Ⅲ群　タンネトウL式 | ３類 | |
| Ⅳ群 | ４類 | |
| Ⅴ群 | | |

（　—　は併行関係を表す）

中田（1998）より作成

| | 美沢川流域 | ママチ編年 | |
|---|---|---|---|
| 大洞$C_1$式 | １ａ期 | | |
| 大洞$C_2$式 | １ｂ期 | | |
| 大洞$C_2$～A式 | ２ａ期 | ママチ１類 | |
| 大洞$C_2$～A式 | ２ｂ期 | ママチ２類 | ← Ta-c 層 |
| 大洞A式 | ３期 | ママチ３類 | |

ンネトウL式は道南の湯の里６遺跡の資料と尾白内Ⅰ群の資料・道東の緑ヶ岡式の古段階が併行関係にあるとした（大沼 1986）（表１）。

以上のように、タンネトウL式は Ta-c 層の上層、つまり駒里上層式の土器群に相当する時期に限定するか、Ta-c 層を挟んだ上下層を併せた時期（駒里下層式の土器群に相当する時期と駒里上層式の土器群に相当する時期を併せた時期）の土器型式とするのか一致した見解が得られていない。このタンネトウL式の問題については、すなわち Ta-c 層を境として駒里下層式に相当する土器群と駒里上層式に相当する土器群についてそれぞれの土器群構成（小杉 1987）明らかにする必要がある。このように、タンネトウL式が指す対象が一致せず分かりづらくなっているため、タンネトウL式という名称は用いず、駒里下層式、駒里上層式という細分された土器型式名を用いた方が良いと思われる。「2-2．分析」以下でその根

拠を述べる。

千歳市のママチ遺跡の報告書ではタンネトウＬ式の細分が行なわれた（種市 1983、中田 1987）（表１）。また、美沢川流域の縄文晩期編年が工藤研二（1997）や中田裕香（1998）（表１）によって論じられ、ママチ遺跡の編年と対比された。福田正宏は、文様帯系統論によって道南部の聖山式土器の変遷を明らかにし、その大洞諸型式と、道央部をはじめとする在地の土器との対比をおし進めている。そしてこの中で大洞$A_1$式と大洞$A_2$式の境界がTa-c 層にあたると想定している（福田 2000）。しかし、道南部の聖山式土器の諸型式と道央部の編年の対応は未だ確定していない。さらに福田は、タンネトウＬ式土器について、文様帯の系統から在地製作の土器も含めて「広義の聖山式土器」とした（福田 2000）。一方、江別市の対雁 2 遺跡では該期の土器群が出土しており、鈴木（2002）は土器群の属性分析をし、縄文晩期後葉の土器群の各段階の属性の消長を示した。また、鈴木・西脇（2003）は土器製作技術の伝統の違いから、在地製作の土器を道南の聖山式土器と同じ括りにすることに反発している。

福田は、林（1981）によって発表され一般的に使用される「大洞系」（亀ヶ岡式土器そのもの、あるいは若干の地域色をおびた土器）・「類大洞系」（亀ヶ岡式土器の影響のもとに成立した在地的な要素のつよい土器）について、感覚的な判断基準であるとして、搬入土器か在地製作の土器かに関わらず亀ヶ岡式土器の文様帯と直接的な対比のできる系列を広義の「亀ヶ岡式土器」と認定する立場をとっている（福田 2004）。しかし、聖山式とタンネトウＬ式のそれぞれの製作技術を明らかにすることで、大洞系の搬入土器・在地製作の大洞系土器・在地製作の土器の三者の状況を遺跡ごとに明らかにしていくことが重要だと思われる。

## 2-2．分析

### 2-2-1．分析対象

土器群構成単位（タイプ）の設定のために、道央部の縄文晩期後葉の土器群を分析する。分析対象は、報告書掲載の既出資料である。その中で底部のみの資料は除外した。また Ta-c 層を境にした上下層の土器群の内容を明らかにするのが目的であるため、Ta-c 層より上層なのか下層なのかが明確な出土状況の資料を中心に扱う。具体的には、千歳市の駒里遺跡（石川 1979）、美々 4 遺跡（森田 1977）、ママチ遺跡（種市 1983、中田 1987）、恵庭市の柏木川遺跡（高橋編 1971）である。ほかに、長沼町のタンネトウ遺跡（野村 1977）、札幌市のＮ 30 遺跡（上野 1998）、江別市の対雁 2 遺跡（西脇 2003）を扱う。

これらの資料の器種・器形・施文部位・文様を検討して、土器群構成単位（タイプ）を設定する。その際、大枠で「在地系土器」「類大洞系土器」「大洞系土器」と捉える。それぞれの定義は、「在地系土器」：大洞式土器の要素を持たない在地製作の土器、「類大洞系土器」：大洞式土器の要素を持つ在地製作の土器、「大洞系土器」：道南や東北地方北部か搬入されたと考えられる大洞式土器（聖山式土器）、である。大洞式土器の要素とは、口縁部が屈曲する器形や、工字文や入組文という文様や、沈線上の瘤という文様要素である。また、量的に主体をなすものを在地製作の土器と評価した。以上を上記の報告書の図や記載から判断して、「在地系土器」「類大洞系土器」「大洞系土器」を想定する。

### 2-2-2．器種・器形・施文部位・文様の検討

#### 2-2-2-1．器種・器形・施文部位

器種は、深鉢・鉢・浅鉢・台付鉢・壺・舟形土器・双口土器・異形土器がある。報告書掲載分のものではあるが、深鉢（50％前後）、鉢•浅鉢（30～40％）が大部分を占め、残りを台付鉢・壺・舟形土器・双口土器・異形土器と、亀ヶ岡式土器の搬入土器やその要素を取り入れた在地製作の土器が占めているようである。

深鉢形の土器は、器壁が底部からまっすぐに外傾するか胴部から口縁部にかけてややふくらむという単純な器形のものがほとんどで器壁が屈曲するような複雑な器形のものは見られない。波状口縁を呈したり突起を有するものもある。口唇部の断面形は内削ぎ状のものと平形のものがあり、口唇上に施文されるものが多い。器面にほとんどが地文の縄文を施され、さらに口縁部に文様が施されるものが多い。

鉢形の土器は、胴部にふくらみをもって口縁部が内湾気味になる椀形のもの、口縁部が外反し胴部との境に屈曲をつくるもの、胴部にさほどふくらみをもたないかまっすぐに外傾し、口唇上の向かい合う位置に 2 個 1 対の突起をもち頂部の下 2 cm ほどの部分に貫通孔をもつものがある。胴部がふくらみ口縁部との境が屈曲し口縁部が外反する土器には、地文の縄文のほかに、口縁部に文様が施されるもの、器面全体に 2 ～ 3 段の文様帯をもつものがある。

浅鉢形の土器は、大型のものから小型のものまで様々である。波状口縁を呈したり、突起をもつものも多い。施文部位は、口縁部（胴部）外面と口唇上、口縁部内面に分けられ、口縁部内面に施文される場合は外面に施文されないものがほとんどである。

ほかに少数の舟形土器、双口土器、異形土器、台付鉢、

壺がある。

舟形土器は上面観が楕円形で横から観ると口縁部の両端がはねあがって、舟でいう舳先と艫の部分が明瞭に認められる器形である。また、胴部がくの字に張り出し稜をつくるものとそうでないものがあり、稜の位置も胴部中央から底部近くまでさまざまである。また舳先と艫の下の口縁部に貫通孔が穿たれるものもある。施文部位は口縁部と胴部で、胴部は稜や無文帯によって文様帯が分けられたり、胴部上半のみに施文される。

双口土器は、細長く胴部がややふくらんだとっくり形を下半部で結合させた形状のものである。口縁部は無文で胴部や底部に施文される。

異形土器は、胴部がふくらみ口縁部がくびれ口唇部に向けて外反する鉢形で､胴部が環状になった器形である。口縁部の長軸の両端に貫通孔がある。胴部に 2 段の文様帯がある。

台付鉢は、浅鉢形の底部に台を付けた器形で、口縁部か胴部全体に文様が施される。

壺形の土器は、頸部に文様が施されるようである。

大洞式土器の器形や文様の要素を取り入れた在地製作と思われる土器は、深鉢形・鉢形・浅鉢形・壺形が見られる。器形の特徴では口縁部が屈曲し口唇部にかけて外反するものなどがあり、文様要素では沈線上の瘤や入組文、工字文などがある。

道南や東北地方から搬入されたと考えられる大洞式土器は浅鉢形と壺形が見られる。

#### 2-2-2-2．文様の定義

ここでは、土器群構成単位（タイプ）を設定するにあたって、文様の名称の定義をしておく。なお、ここで定義する文様は、文様要素ではなく複数の文様要素の複合体としての名称である。(図 3 )

•「平行縄線文」……縄文原体による側面圧痕が数条横走するもの。(図 3-1)

•「平行沈線文」……数条の沈線が横走するもの。櫛歯状工具によると思われる条痕が横走するものもここに含める。この「平行沈線文」の上端や下端に刺突列や斜位の短沈線などの文様要素が加わるものもある。(図 3-1)

•「格子目文」……「平行縄線文」や「平行沈線文」に重ねて縦位の短沈線（縄文原体による側面圧痕）が等間隔に並んだり、数条ずつ束になった斜位の沈線（縄文原体による側面圧痕）が交互に施されて格子目状になるもの（斜位・縦位線文、断続山形文：鈴木 2002)。さらに、斜位の沈線が口縁部をめぐり、これと反対向きの斜めの沈線がめぐって格子目状になるもの。この数条ずつ束になった斜位の沈線（縄文原体による側面圧痕）が下地の「平行縄線文」や「平行沈線文」を分断し格子目状にならないものもここに含める。(図 3-2～ 6 )

•「円弧文」……括弧状の沈線と縦横の短沈線が組み合わさった文様。「平行沈線文」の上に重ねられたり、「円弧文」を施した後に条痕や棒状工具による刺突で隙間を埋められたり、ただ地文の縄文の上に施される場合がある（円弧文：種市 1983、括弧文：鈴木 2002）括弧状の沈線がつながって渦巻状になるもの（渦巻文：鈴木 2002）も含める。(図 3-7～10)

•「蛇行線文」……縦の数条の波状の沈線が束となって等間隔に並べられる文様。「平行沈線文」「菱形文」「弧線文」などの上に重ねる場合と、それらを分断して重ならない場合がある。波状沈線は 1 条のものもある。縦位に蛇行する沈線とその他横位の文様との複合体を「蛇行沈線文」と呼ぶ（工藤 1985）と同義。種市は「平行沈線文」に縦位の数条の蛇行沈線を重ねるものは「格子目文」に含め、横位の文様を分断するものだけを「蛇行沈線文」と呼んでいる (種市 1983) が、ここでは重なる場合も「蛇行線文」に含める。(図 3-11～13)

•「波状線文」……一条から数条の波状沈線が横走するもの。波頂部が鋭く尖り鋸歯状になるもの (連続山形文：鈴木 2002) も含む。文様帯の下端や上端を区画するだけの場合は含まず、波状沈線のみが描かれているか波状線文が主体となっているものである。

•「刺突文」……刺突列が一列から数列横走するもの。刺突は文様帯の区画や他の文様要素の隙間を充填する場合によく使われるが、そのような場合は含まず、刺突列のみによって文様が描かれているか刺突列が主体となっている場合である。刺突は棒状工具の先端によると思われるものや縄端、半截竹管によると思われる爪形のものが見られる。

•「弧線文」……上向きの弧線と下向きの弧線が 2 、 3 条ずつ交互か、あるいは向かい合って平行沈線間に配されるもの。交互に配される場合は、上向きの弧線と下向きの弧線が端部でつながって器面を一周する大きな波状線になるものもある。沈線や縄文原体による側面圧痕で表現される。(弧線文、曲線文：種市 1983、弧線文：鈴木 2002) (図 3-14)

•「菱形文」……「弧線文」の弧線を直線化し、三角形 (三角線文：鈴木 2002) や菱形（菱形文：鈴木 2002）を描くもの。沈線や縄文原体による側面圧痕で表現される。(図 3-15)

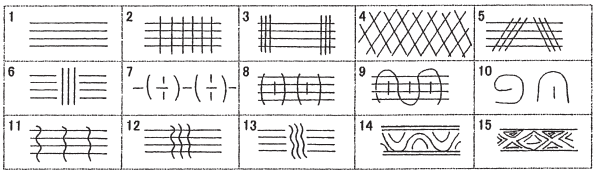


図 3　文様模式図

### 2-2-3．土器群構成単位（タイプ）設定

#### 2-2-3-1．在地系土器

大洞式土器の要素を持たない在地製作の土器を「在地系土器」とする。

〈深鉢形〉

深鉢形や鉢形を呈するもの。器形は単純な形状のものが多く、器壁が底部からまっすぐに外傾して口唇部に至るもの、胴部はまっすぐに外傾するが口縁部は直交し胴部との境に稜をつくるもの、胴部から口縁部にかけてわずかにふくらみながら立ち上がるものがあり、その変化は漸移的で微妙なもので区別は困難である。胴部や口縁部が屈曲するような形のものは見られない。器高は 30 cm から 40 cm のものが中心で、50 cm を超える大型のものや 20 cm より小さなものもある。波状口縁を呈するものや突起をもつものがある。口唇部の断面形は平形のものと内削ぎ状のものがあり、口唇上には直交する刻みの列や口唇に沿ってめぐる縄文原体による側面圧痕や回転施文の組み合わせで施文されるものが多い。器面にはほとんどのものに地文の縄文が施され、口縁部に文様が施文されることが多い。文様帯の上下端が刺突列で区画されたり、下端だけに刺突列が波状沈線や鋸歯状の沈線が一条施されるものもある。

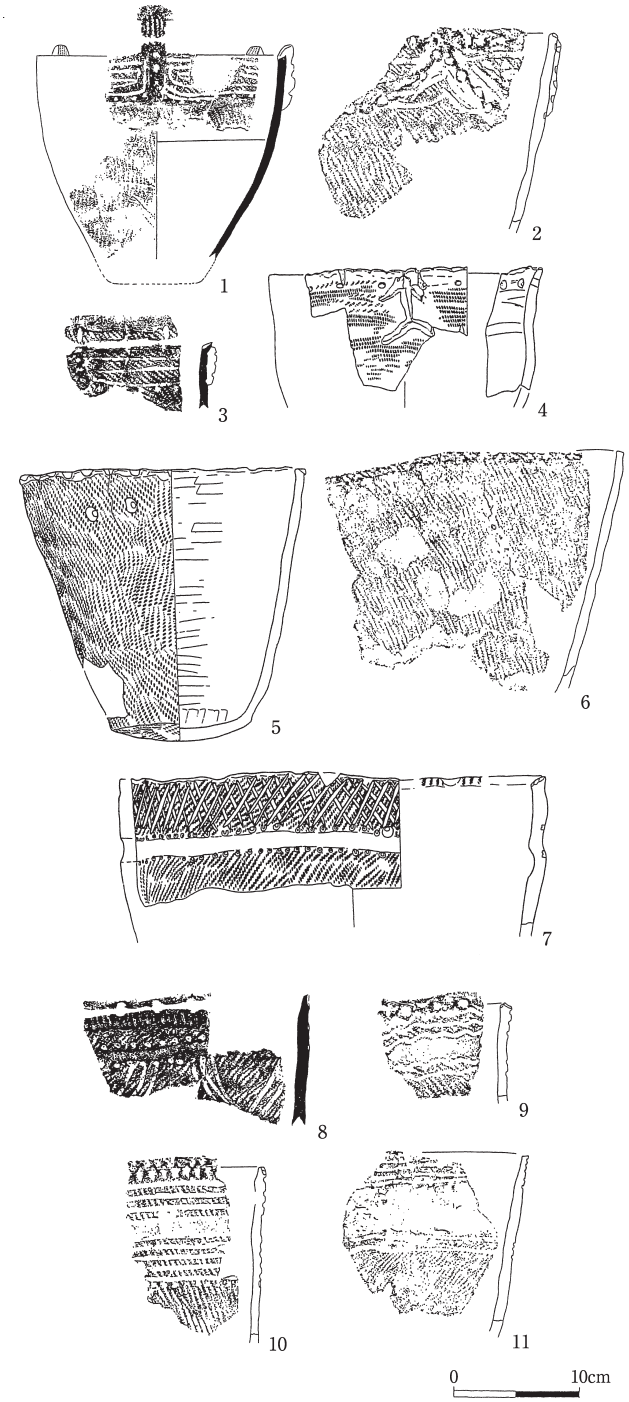
器形では口縁部に隆帯（貼付帯）が作出されているもの（①、②）とそうでないもの（③～⑭）で分けた。さらに、器面が地文の縄文のみのもの（③）と口縁部に文様が施されるもの（④～⑭）で分け、④から⑭は口縁部の文様の種類で分けた。

深鉢形①（突起隆帯）

口唇上の突起と一体となり口縁部まで縦長の貼付帯が作出されているもの。貼付帯の下部が二股に開くものもある。隆帯の上には刻みや刺突が縦の列状に施される。ママチⅠ群、ママチ 2 類、駒里下層、美々 4 ⅡB、柏木川、対雁 2 で出土。（図 4-1）

深鉢形②（隆帯）

口唇上の突起や突起の有無とは関わり無く口縁部に隆帯が作出されるもの。N 30 遺跡では、上向きの矢印の下部が二股に開いているような形の貼付帯が作出されている土器があり、貼付帯上には刻みや刺突は施されていない。ほかにはママチⅣ群に 1 個体あり、縦長の貼付帯の下部が二股に開く「人」形でその上には円形の刺突が並ぶ。ママチⅣ群、駒里上層、N 30 で出土。（図 4-2、3、4）




（①：1（駒里下層）、②：2（ママチⅣ群）、3（駒里上層）、4（N 30）、③：5（ママチ 1 類）、6（ママチⅤ群）、④：7（ママチⅡ群）、8（駒里上層）、⑤：9・10（ママチⅢ群）、11（ママチⅣ群））

図 4　在地系深鉢形①・②・③・④・⑤タイプ

深鉢形③（縄文）

器面には地文の縄文のみが施され、口縁部に文様帯を持たないもの。わずかに地文の縄文を持たないものもあり、ここに含める。ママチII・III・IV・V群、ママチ1・2類、駒里上層・下層、美々4ＩＢ・IIＢ、柏木川、タンネトウＡ発掘区、N 30、対雁2で出土。（図4-5、6）

深鉢形④（刺突列で区画される無文帯）

上下端を刺突列で区画された磨消帯あるいは無文帯を持つもの。口縁上部に別の文様帯があり、口縁下部に無文帯を作る場合や、口縁部を三段に分けて、中段に無文帯を挟む場合、中段の文様帯を上・下段の無文帯が挟む場合がある。無文帯が接する文様帯に垂直方向に貫入する場合、口唇上に突起のある場所の直下であることが多い。ママチII群、ママチ2類、駒里上層・下層、美々4ＩＢ・IIＢ、柏木川、タンネトウＡ発掘区、対雁2で出土。（図4-7、8）

深鉢形⑤（無文帯）

横走する沈線や波状線間に無文帯あるいは磨消帯が作られるもの。刺突列で区画しない。ママチIII・IV群、ママチ3類、美々4ＩＢ、N 30、対雁2で出土。（図4-9、10、11）

深鉢形⑥（平行縄線文）

口縁部に「平行縄線文」が施文されるもの。上下端を刺突列が区画したり縄文原体による側面圧痕間に刺突列が組み合わさることもある。ママチＩ群、ママチ1類、駒里上層・下層、美々4ＩＢ・IIＢ、柏木川、N 30、対雁2で出土。（図5-12、13）

深鉢形⑦（平行沈線文）

口縁部に「平行沈線文」が施文されるもの。櫛歯状工具によると思われる条痕が横走するものも含む。上下端を刺突列が区画したり、沈線間に刺突列が組み合わさることもある。ママチＩ・II・III・IV・V群、ママチ2・3類、駒里上層・下層、美々4ＩＢ・IIＢ、柏木川、タンネトウＡ発掘区、N 30、対雁2で出土。（図5-14、15、16）

深鉢形⑧（格子目文）

口縁部に「格子目文」が施文されるもの。沈線や縄の側面圧痕ではなく、櫛歯状工具によると思われる条痕で施されるものもある。文様帯の上下端や格子目文の中に刺突が組み合わさることもある。ママチII・III・IV・V群、駒里下層、美々IVＩＢ・IIＢ、タンネトウＡ発掘区、対雁2で出土。（図5-17、18）

深鉢形⑨（円弧文）

口縁部に「円弧文」が施文されるもの。ママチII群、ママチ2類、駒里下層、美々4 IIＢ、対雁2で出土。（図5-19、20）

深鉢形⑩（蛇行線文）

口縁部に「蛇行線文」が施文されるもの。ママチIII・IV群、ママチ4類、駒里上層、美々4ＩＢ、タンネトウＡ発掘区、N 30で出土。（図5-21、22）

深鉢形⑪（波状線文）

口縁部に「波状線文」が施文されるもの。横走する数条の沈線の中央に一条の波状沈線や鋸歯状沈線が描かれるものも含める。ママチIII群、ママチ3・4類、駒里上層、美々4ＩＢ、タンネトウＡ発掘区で出土。（図5-23）

深鉢形⑫（刺突文）

口縁部に「刺突文」が施文されるもの。駒里上層、タンネトウＡ発掘区、N 30、対雁2で出土。（図5-24、25）

深鉢形⑬（弧線文）

口縁部に「弧線文」が施文されるもの。ママチV群、ママチ4類、N 30で出土。（図5-26）

深鉢形⑭（菱形文）

口縁部に「菱形文」が施文されるもの。ママチV群、N 30で出土。（図5-27、28）

〈鉢形〉

鉢形を呈するもので以下の特殊な器形のものを深鉢形から分離した。胴部がふくらみ、あるいはふくらみが鋭くなって稜をつくることもあり、口縁部がやや外反するため胴部との境が屈曲するもの（鉢形③、④、⑤）と、胴部がふくらみ口縁部がわずかに内湾気味になる椀形のもの（鉢形①）と、器壁はほぼまっすぐに外傾するかわずかにふくらみをもち、2個1組で向かい合う位置に大突起と小突起が作出され（小突起にあたるものを持たないものもある）、大突起の頂部の下2 cmほどのところに貫通孔が穿たれているもの（鉢形②）がある。器高は10～15 cmとやや小型のものが中心である。

鉢形①

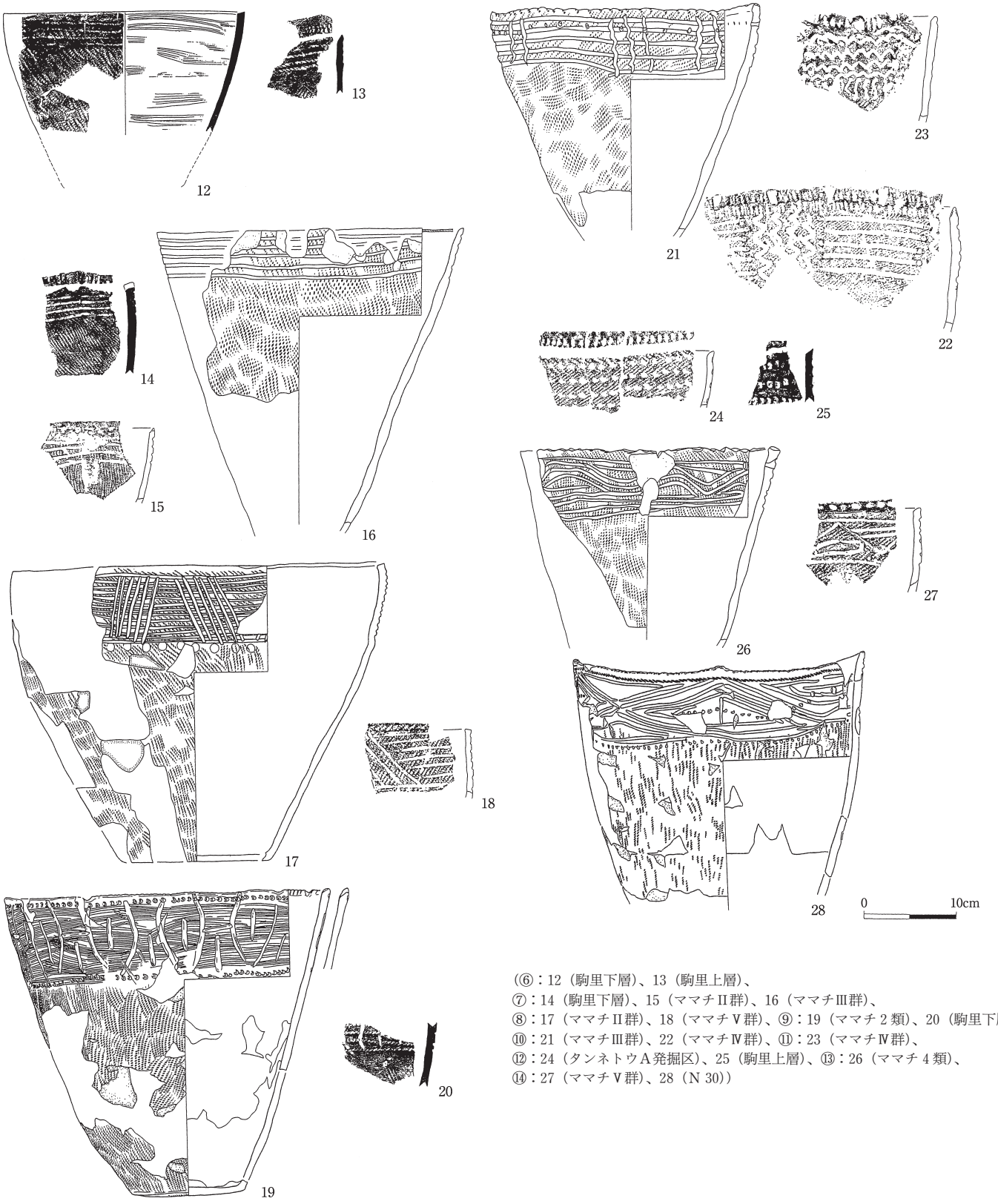
胴部がふくらみ口縁部がわずかに内湾気味になる椀形のもの。器面には地文の縄文だけが施される。ママチIII群、ママチ4類、美々4ＩＢ、対雁2で出土。（図6-29）

鉢形②

器壁はほぼまっすぐに外傾するかわずかにふくらみをもち、2個1組で向かい合う位置に大突起と小突起が作出され(小突起にあたるものを持たないものもある)、大突起の頂部の下2 cmほどのところに貫通孔が穿たれているものである。器面には地文の縄文だけが施される。ママチIII群において顕著に見られ、N 30、対雁2でも出土。（図6-30）

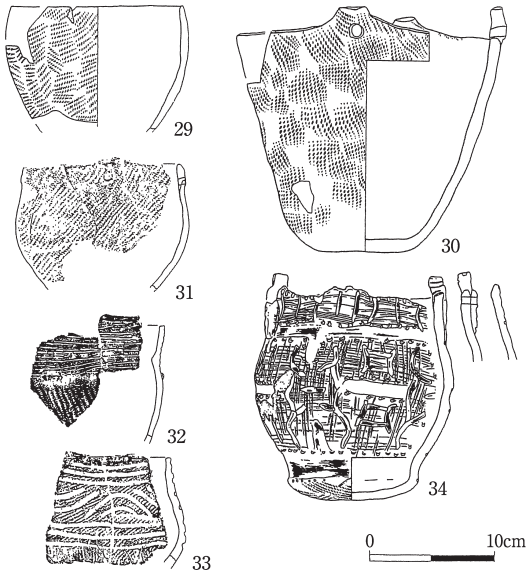
鉢形③（縄文）

胴部がふくらみ、あるいはふくらみが鋭くなって稜を




(⑥：12（駒里下層）、13（駒里上層）、
⑦：14（駒里下層）、15（ママチⅡ群）、16（ママチⅢ群）、
⑧：17（ママチⅡ群）、18（ママチⅤ群）、⑨：19（ママチ 2 類）、20（駒里下層）、
⑩：21（ママチⅢ群）、22（ママチⅣ群）、⑪：23（ママチⅣ群）、
⑫：24（タンネトウＡ発掘区）、25（駒里上層）、⑬：26（ママチ 4 類）、
⑭：27（ママチⅤ群）、28（N 30））

図 5　在地系深鉢形⑥・⑦・⑧・⑨・⑩・⑪・⑫・⑬・⑭タイプ




（①：29（ママチⅢ群）、②：30（ママチⅢ群）、③：31（ママチ４類）、④：32（ママチⅠ群）、33（ママチⅤ群）、⑤：34（ママチ２類））

図６　在地系鉢形①・②・③・④・⑤タイプ

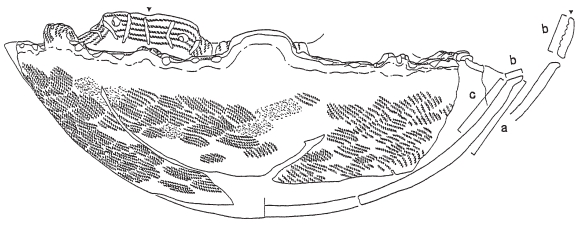
つくることもあり、口縁部がやや外反するため胴部との境が屈曲する器形のものの中で、器面には地文の縄文だけが施されるもの。ママチⅤ群、ママチ４類、美々４ＩＢ、Ｎ 30 で出土。（図 6-31）

鉢形④（口縁部文様）

鉢形③と器形は同じで、口縁部に文様が描かれるもの。ママチⅠ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群、タンネトウＡ発掘区、Ｎ 30、対雁 2 で出土。（図 6-32、33）

鉢形⑤（多段文様帯）

鉢形③と器形は同じで、無文帯を挟んで２～３段の文様帯を器面全体に配するもの。口唇上に突起があるものや、その突起と一体となった隆帯（在地系深鉢形①タイプと同じもの）が口縁部に作出されるものが多い。ママチ２類のみで出土。（図 6-34）




ａ：口縁部（胴部）外面
ｂ：口唇上（突起上および突起内面も含む）
ｃ：口縁部内面

（※江別市対雁２遺跡の資料）

図７　浅鉢施文箇所模式図

〈浅鉢形〉

浅鉢形あるいは皿形に近い形状のもの。器高が 15 cm ほどで径が 30 cm から 40 cm ほどになる大型のものから小型のものまで様々である。波状口縁を呈したり、突起をもつものも多い。施文部位は、ａ口縁部（胴部）外面、ｂ口唇上(突起上および突起内面も含む)、ｃ口縁部内面の三つに分けられ、口縁部内面に施文される場合は外面に施文されないものがほとんどである。そこで、ｂ(①、②)、ａ＋ｂ（③、④）、ｃ＋ｂ（⑤、⑥）に分類した。ただし、ｂ（口唇上）は施文されないものもあるが含める(図７)。さらに、波状口縁や口唇上に突起をもつもの（②、④、⑥）と平縁のもの（①、③、⑤）に分類した。

浅鉢形①

平縁で、器面は地文の縄文だけが施される。無文のものもわずかにある。ママチⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群、ママチ１・２類、駒里上層・下層、美々４ＩＢ・ⅡＢ層、柏木川、タンネトウＡ発掘区、Ｎ 30、対雁 2 で出土。（図 8-35、36）

浅鉢形②

波状口縁あるいは突起を持ち、器面は地文の縄文だけが施されるもの。わずかに無文のものがある。突起の内面には縄の側面圧痕で同心円状の文様や格子目状の文様が施されたり、突起の形状に沿って沈線が描かれるものもある。ママチⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群、ママチ２・４類、駒里上層・下層、美々４ＩＢ・ⅡＢ、柏木川、タンネトウＡ発掘区、Ｎ 30、対雁 2 で出土。（図 8-37、38）

浅鉢形③

平縁で、器面および口唇上に施文されるもの。ママチⅠ・Ⅱ・Ⅴ群、ママチ１・２類、駒里下層、美々４ⅡＢ、柏木川、タンネトウＡ発掘区、Ｎ 30、対雁 2 で出土。（図 8-39、40）

浅鉢形④

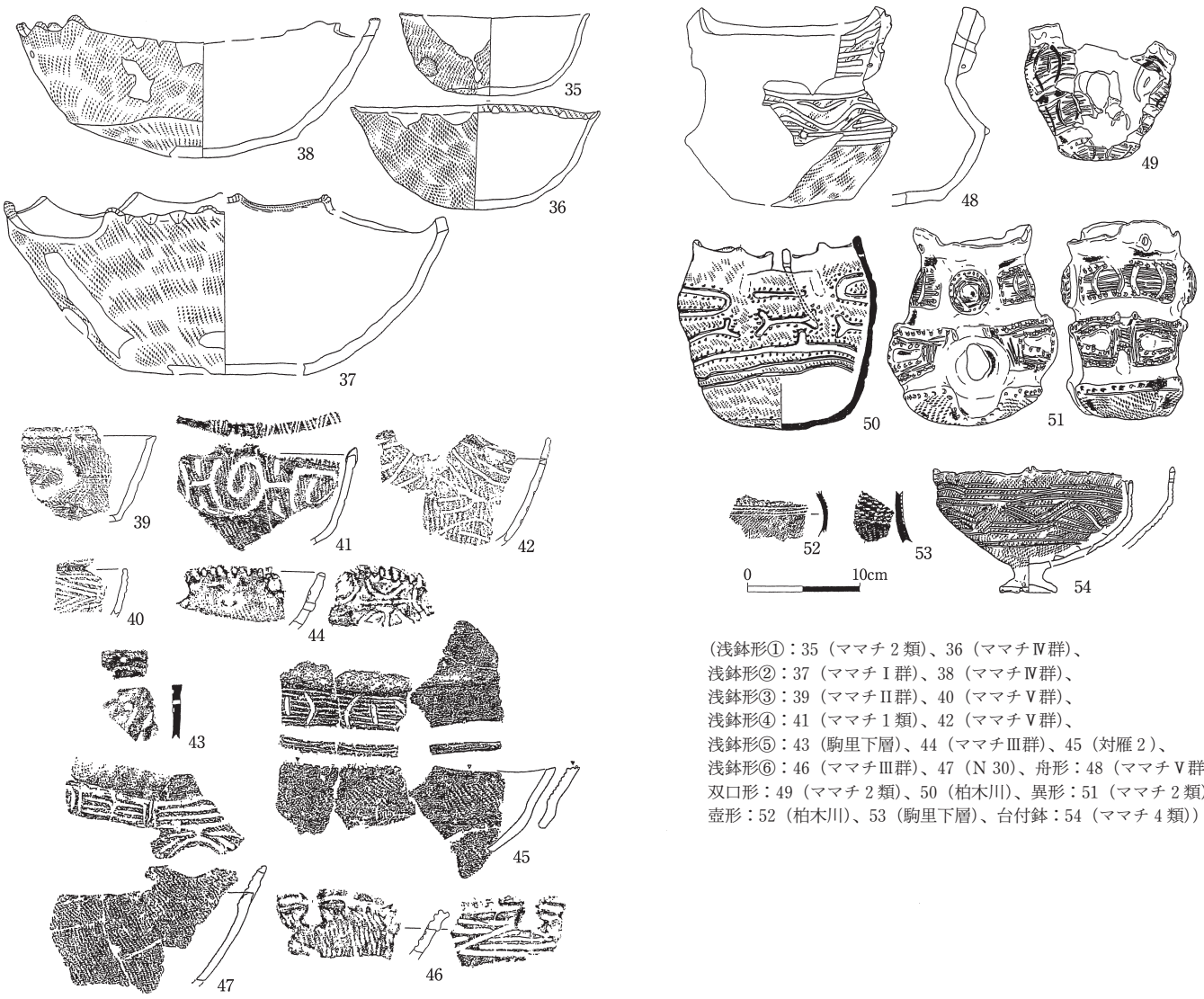
波状口縁あるいは突起を持ち、器面および口唇上に施文されるもの。突起の内面には縄の側面圧痕や沈線で文様が描かれるものもある。ママチⅠ・Ⅱ・Ⅴ群、ママチ１・３類、駒里下層、タンネトウＡ発掘区、Ｎ 30、対雁 2 で出土。図 8-41、42）

浅鉢形⑤

平縁で、器面は地文の縄文のみで、口唇上と口縁部内面に施文されるもの。ママチⅢ・Ⅳ群、駒里上層・下層、タンネトウＡ発掘区、Ｎ 30、対雁 2 で出土。（図 8-43、44、45）

浅鉢形⑥

波状口縁あるいは突起を持ち、口唇上と口縁部内面に




（浅鉢形①：35（ママチ 2 類）、36（ママチⅣ群）、
浅鉢形②：37（ママチⅠ群）、38（ママチⅣ群）、
浅鉢形③：39（ママチⅡ群）、40（ママチⅤ群）、
浅鉢形④：41（ママチ 1 類）、42（ママチⅤ群）、
浅鉢形⑤：43（駒里下層）、44（ママチⅢ群）、45（対雁 2 ）、
浅鉢形⑥：46（ママチⅢ群）、47（N 30）、舟形：48（ママチⅤ群）、
双口形：49（ママチ 2 類）、50（柏木川）、異形：51（ママチ 2 類）、
壺形：52（柏木川）、53（駒里下層）、台付鉢：54（ママチ 4 類））

図 8　在地系浅鉢形①・②・③・④・⑤・⑥・舟形・双口形・異形・壺形・台付鉢タイプ

施文されるもの。突起の内面には縄の側面圧痕や沈線で文様が描かれるものもある。ママチⅢ群、タンネトウＡ発掘区、N 30 で出土。（図 8-46、47）

〈舟形土器〉

舟形

舟形土器は、上面観が楕円形で横から観ると、長軸の口縁部の両端がはねあがって、舟でいう舳先と艫の部分が明瞭に認められる器形である。また、胴部がくの字に張り出し稜をつくるものとそうでないものがあり、稜の位置も胴部中央から底部近くまでさまざまである。また舳先と艫の下の口縁部に貫通孔が穿たれるものもある。施文部位は口縁部と胴部で、胴部は稜や無文帯によって文様帯が分けられたり、胴部上半のみに施文される。マママチⅣ・Ⅴ群、ママチ 4 類、タンネトウＡ発掘区、N 30 で出土。（図 8-48）

〈双口土器〉

双口形

双口土器は、細長く胴部がややふくらんだとっくり形を下半部で結合させた形状のものである。口縁部は無文で胴部や底部に施文される。ママチ 2 類と柏木川でそれぞれ 1 点出土したのみである。ママチ 2 類の土器は、連結部の胴部なかほどに円形の穴が開いている形状で、胴部と底部に施文され、胴部は無文帯で分けて二段の文様帯を持っている。柏木川の土器は、胴部なかほどに穴は開いておらず、波状口縁になっている。胴部と底部に施文されているが、胴部は刺突で区画した無文帯で描く文

様である。(図 8-49、50)

〈異形土器〉

異形

異形土器は、胴部がふくらみ口縁部がくびれ口唇部に向けて外反する鉢形で、胴部が環状になった器形である。口縁部の長軸の両端に貫通孔がある。胴部に 2 段の文様帯がある。ママチ 2 類で 1 点の出土。(図 8-51)

〈壺形土器〉

壺形

ほとんどが破片資料であるため器形などは定かではないが、頸部に施文されるものが多いようである。駒里下層、柏木川、N 30、対雁 2 で出土。(図 8-52、53)

〈台付鉢〉

台付鉢

台付鉢は、浅鉢形の底部に台を付けた器形で、口縁部か胴部全体に文様が施される。ママチ 4 類、タンネトウ A 発掘区、N 30 で出土。(図 8-54)

### 2-2-3-2. 類大洞系土器

大洞式土器の要素を持つ在地製作の土器を「類大洞系土器」とする。大洞式土器の要素とは、口縁部が屈曲する器形や、工字文や入組文という文様や、沈線上の瘤という文様要素である。深鉢形、鉢形、浅鉢形、壺形がある。

深鉢形

ママチⅢ・Ⅴ群、ママチ 4 類、駒里上層、タンネトウ A 発掘区、N 30、対雁 2 で出土。(図 9-55)

鉢形

ママチⅢ群、ママチ 3 ・ 4 類、美々 4 ⅡB、柏木川、N 30、対雁 2 で出土。(図 9-56、57)

浅鉢形

ママチⅢ・Ⅳ・Ⅴ群、ママチ 3・4 類、駒里上層、美々 4 ⅠB・ⅡB、タンネトウ A 発掘区、N 30、対雁 2 で出土。(図 9-58)

壺形

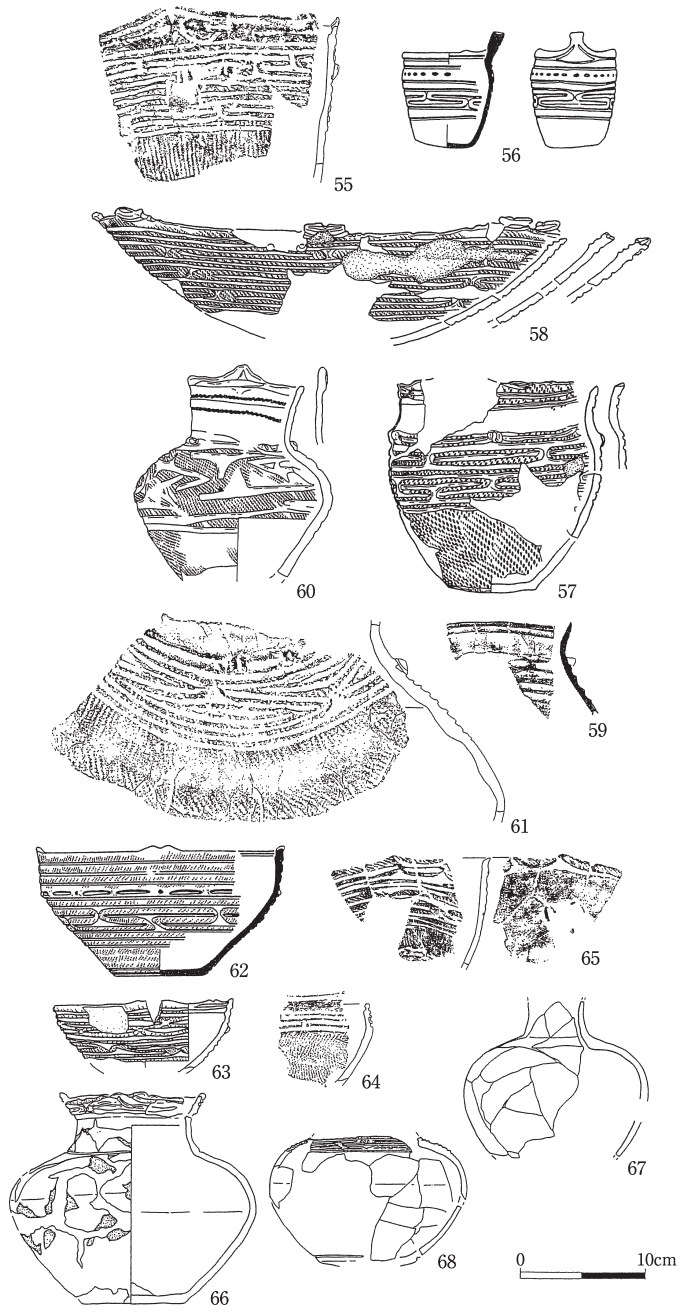
ママチⅢ・Ⅴ群、ママチ 2 ・ 4 類、駒里上層・下層、美々 4 ⅠB・ⅡB、タンネトウ A 発掘区、N 30、対雁 2 で出土。(図 9-59、60、61)

### 2-2-3-3. 大洞系土器

道南や東北地方北部か搬入されたと考えられる土器を「大洞系土器」とする。浅鉢形と壺形のものがある。

浅鉢形

ママチⅢ群、ママチ 1 類、柏木川、タンネトウ A 発掘区から出土。特にタンネトウ A 発掘区から多く出土して




(類大洞系深鉢形：55 (ママチⅢ群)、類大洞系鉢形：56 (柏木川)、57 (ママチ 3 類)、類大洞系浅鉢形：58 (ママチ 3 類)、類大洞系壺形：59 (駒里下層)、60 (ママチ 1 類)、61 (ママチ 3 類)、大洞系浅鉢形：62 (柏木川)、63 (ママチ 2 類)、64 (ママチⅢ群)、65 (タンネトウ A 発掘区)、大洞系壺形：66 (ママチ 1 類)、67、68 (ママチ 4 類))

図 9　類大洞系深鉢形・鉢形・浅鉢形・壺形タイプ、大洞系浅鉢形・壺形タイプ

いる。(図 9-62、63、64、65)

壺形

ママチⅡ群、ママチ 1・4 類で出土。(図 9-66、67、68)

## 2-3．土器群構成の検討

### 2-3-1．千歳市周辺の土器群構成の検討

前章において、既出資料から設定した土器群構成単位(タイプ)のそれぞれの個体数(報告書掲載の資料中から底部のみの資料を除いた個数)の表が表 2 である。

「Ta-c」と書いている列よりも上の列の土器群が、実際には Ta-c 層よりも下層で駒里下層式に相当する土器群である。ママチⅠ・Ⅱ群、ママチ 1・2 類、駒里下層、美々 4 ⅡB、柏木川の土器群は、Ta-c 層よりも下層から出土することが確認されている資料である。今、これらの資料を併せて「下層資料」と仮に呼ぶ。

「Ta-c」と書いている列よりも下の列の土器群、ママチⅢ・Ⅳ・Ⅴ群、ママチ 3・4 類、駒里上層、美々 4 ⅠB までが、Ta-c 層よりも上層で駒里上層式に相当する土器群である。これらの資料は Ta-c 層よりも上層から出土することが確認されている。これらの資料は「上層資料」と仮に呼ぶ。

この「下層資料」と「上層資料」のタイプ別個体数を棒グラフにしたのが図 10 である。この「下層資料」は駒里下層式に相当する土器型式で、「上層資料」は駒里上層式に相当する土器型式であり、それぞれの土器群構成の内容を明らかにする。

#### 2-3-1-1．「下層資料」の内容

器種は、在地系土器では深鉢、鉢、浅鉢、双口、異形、壺で構成され、類大洞系土器は、鉢、浅鉢、壺、大洞系土器は、浅鉢、壺で構成される。

在地系の深鉢は、器形は単純な形状のものが多く、器壁が底部からまっすぐに外傾して口唇部に至るもの、胴部はまっすぐに外傾するが口縁部は直交し胴部との境に

表 2　既出資料および K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 14 d 層出土資料のタイプ別個体数

| | 在地系 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 類大洞系 | | | | 大洞系 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 深鉢形 | | | | | | | | | | | | | | 鉢形 | | | | | 浅鉢形 | | | | | | 舟形 | 双口形 | 異形 | 壺形 | 台付鉢 | 深鉢形 | 鉢形 | 浅鉢形 | 壺形 | 深鉢形 | 鉢形 | 浅鉢形 | 壺形 |
| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | ⑫ | ⑬ | ⑭ | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | | | | | | | | | | | | |
| ママチⅠ群 | 1 | | | | | 6 | 1 | | | | | | | | | | | 10 | | 5 | 2 | 6 | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| ママチⅡ群 | | | 3 | 9 | | | 2 | 11 | 7 | | | | | | | | | | 4 | 12 | 11 | 7 | 8 | | | | | | | | | | | 1 | 3 |
| ママチ 1 類 | | | 2 | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | 1 | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| ママチ 2 類 | 1 | | 1 | 1 | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | 1 | 2 | 1 | | | | | 1 | 1 | | | | | | | |
| 駒里下層 | 1 | | 7 | 3 | | 11 | 11 | 5 | 2 | | | | | | | | | | | 17 | 15 | 9 | 2 | 1 | | | | | 1 | | | | | 8 | | |
| 美々 4 ⅡB | 2 | | 6 | 5 | | 10 | 4 | 4 | 1 | | | | | | | | | | | 3 | 4 | 9 | | | | | | | | | | 3 | 13 | 2 | | |
| 柏木川 | 2 | | 5 | 2 | | 3 | 8 | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | 1 | | | | | 1 | | 1 | | | 3 | | | 1 | |
| Ta-c 層 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ママチⅢ群 | | | 8 | | 5 | | 30 | 6 | | 6 | 2 | | | | 1 | 9 | | 1 | | 21 | 11 | | | 3 | 2 | | | | | 8 | 3 | 10 | 11 | | | 1 | |
| ママチ 3 類 | | | | | 1 | | 5 | | | | 2 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | 1 | 3 | | | | | |
| ママチⅣ群 | | 1 | 4 | | 1 | | 21 | 4 | | 12 | | | | | | | | 1 | | 3 | 4 | | | 1 | | 1 | | | | | 2 | | | | |
| ママチⅤ群 | | | 1 | | | | 1 | 8 | | | | | 10 | 1 | | | 2 | 9 | | | | 4 | 3 | | | 8 | | | 4 | 1 | | 1 | 2 | | | |
| ママチ 4 類 | | | | | | | | | | 1 | 1 | | 2 | | 1 | | 1 | | | | 1 | | | | | 4 | | | 2 | 1 | 2 | 2 | 2 | | | 2 |
| 駒里上層 | | 1 | 4 | 1 | | 4 | 17 | | | 2 | 5 | 2 | | | | | | | | 2 | 4 | | | 4 | | | | | | 7 | | 3 | 3 | | | |
| 美々 4 ⅠB | | | 3 | 3 | 2 | 2 | 9 | 1 | | 2 | 6 | | | | 1 | | 2 | | | 2 | 2 | | | | | | | | | | | 4 | 2 | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| タンネトウA | | | 6 | 11 | | | 45 | 4 | | 3 | 9 | 8 | | | | | | 2 | | 7 | 6 | 26 | 4 | 7 | 5 | 1 | | | | 1 | | 3 | 4 | | | 21 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| BSK 14 d 層 | 2 | 1 | 69 | 13 | | 13 | 14 | 2 | 18 | | | 8 | | 1 | | | | | | 30 | 20 | 3 | 1 | | | | | | 1 | | 2 | | 1 | | | | 1 |

(※ BSK 14 d 層は K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 14 d 層のこと)

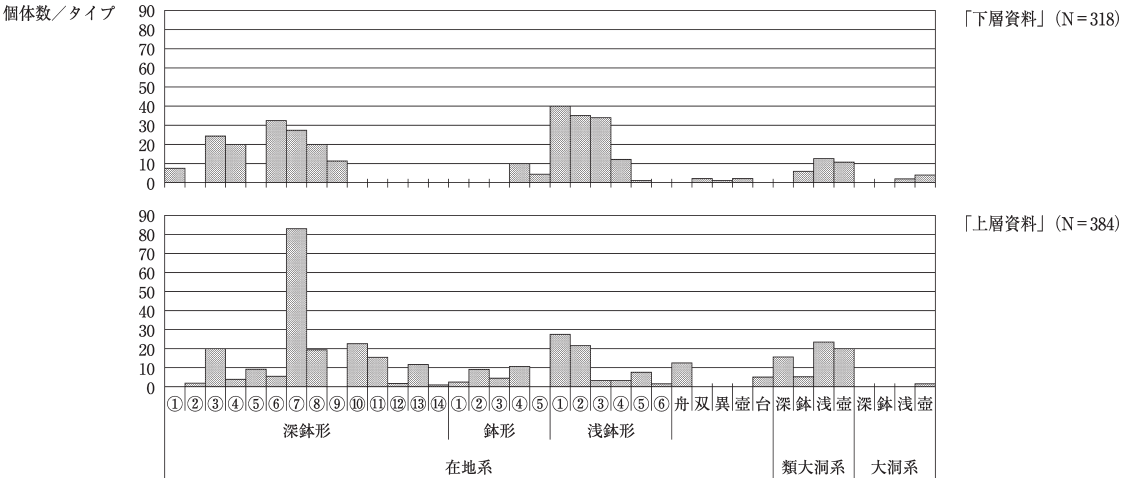



図 10　「下層資料」と「上層資料」の土器群構成

稜をつくるもの、胴部から口縁部にかけてわずかにふくらみながら立ち上がるものがあり、その変化は漸移的で微妙なものである。胴部や口縁部が屈曲するような形のものは見られない。器高は 30 cm から 40 cm のものが中心で、50 cm を超える大型のものや 20 cm より小さなものもある。波状口縁を呈するものや突起をもつものがあり、突起と一体となり口縁部まで縦長の貼付帯が作出されることがある(②)。貼付帯上には刻みや刺突が縦の列状に施される。口唇部の断面形は平形のものと切り出し形のものがあり、口唇上には直交する刻みの列や口唇に沿ってめぐる縄文原体による側面圧痕や回転圧痕の組み合わせで施文されるものが多い。器面にはほとんどのものに地文の縄文が施され、口縁部に文様が施文されることが多い。文様帯の上下端が刺突列で区画されたり、下端だけに刺突列が波状沈線や鋸歯状の沈線が一条施されるものもある。また、口縁部に無文帯あるいは磨消帯をもつものがあり、必ず上下端を刺突列で区画する（④)。その無文帯が口縁部下半に作られ上半に文様帯があったり、口縁部を三段に分け中段に無文帯を挟む場合、中段の文様帯を上下段の無文帯が挟む場合がある。この無文帯は垂直方向に貫入する場合がある。口縁部の文様は、平行縄線文（⑥)、平行沈線文（⑦)、格子目文（⑧)、円弧文（⑨）が見られる。

在地系の鉢は、胴部がややふくらみ、口縁部がやや外反する器形のものがあり、口縁部に施文される（④）か、器面全体に 2 〜 3 段の文様帯が配される（⑤)。

在地系の浅鉢は、波状口縁や突起を持つものも多く、突起の内面や口唇上に直交する刻みの列や口唇に沿ってめぐる縄文原体による側面圧痕や縄文原体の回転施文がなされることが多い。外面に地文の縄文のみのものと、外面に文様が描かれる場合が多く、口縁部内面に施文されるのはわずかである。

#### 2-3-1-2.「上層資料」の内容

器種は、在地系土器では深鉢、鉢、浅鉢、台付鉢、舟形、壺で構成され、類大洞系土器は深鉢、鉢、浅鉢、壺、大洞系土器は浅鉢、壺で構成される。在地系土器において、「下層資料」で見られた双口、異形が消滅し、台付鉢、舟形が出現する。

在地系の深鉢の器形は下層のものと変化はない。口唇上の突起と一体となった隆帯をもつもの（①）が消滅し、突起と無関係に口縁部に隆帯をもつもの（②）が少量出現する。口唇部の断面形は内削ぎ状のものが多く、口唇上には、直交する刻みの列や口唇に沿ってめぐる縄文原体による側面圧痕や回転施文が施されるものが多い。器面には地文の縄文だけが施されるもの（③）もあるが、口縁部に文様が描かれるものが多い。「下層資料」において見られた、刺突列で区画された無文帯をもつもの(④)は減り、横走する沈線と沈線の間や波状沈線と波状沈線の間に刺突で区画しない無文帯をもつもの（⑤）が出現する。口縁部の文様は、平行縄線文（⑥）がわずかになり、平行沈線文（⑦）が激増する。格子目文（⑧）は「下層資料」に引き続いて存在し、円弧文（⑨）が消滅する。「上層資料」になって、蛇行線文（⑩)、波状線文（⑪)、刺突文（⑫)、弧線文（⑬)、菱形文（⑭）が出現する。地文の縄文だけのもの（③)、平行沈線文（⑦）は「下層資料」からその内容に変化はない。平行沈線文は、「下層資料」「上層資料」ともに、沈線の幅などは多様でありその状態に変化がない。一方、格子目文（⑧）は「下層資料」においてはすべて下地の数条の横走する沈線や縄文原体による側面圧痕を斜位や縦位の短沈線や縄文原体による側面圧痕が重ねられて格子目状を呈していたが、「上層資料」においては重ねられずに分断し、格子目状を呈さないものも出現する。蛇行線文（⑩）においても、重ねられるものと分断するものがある。

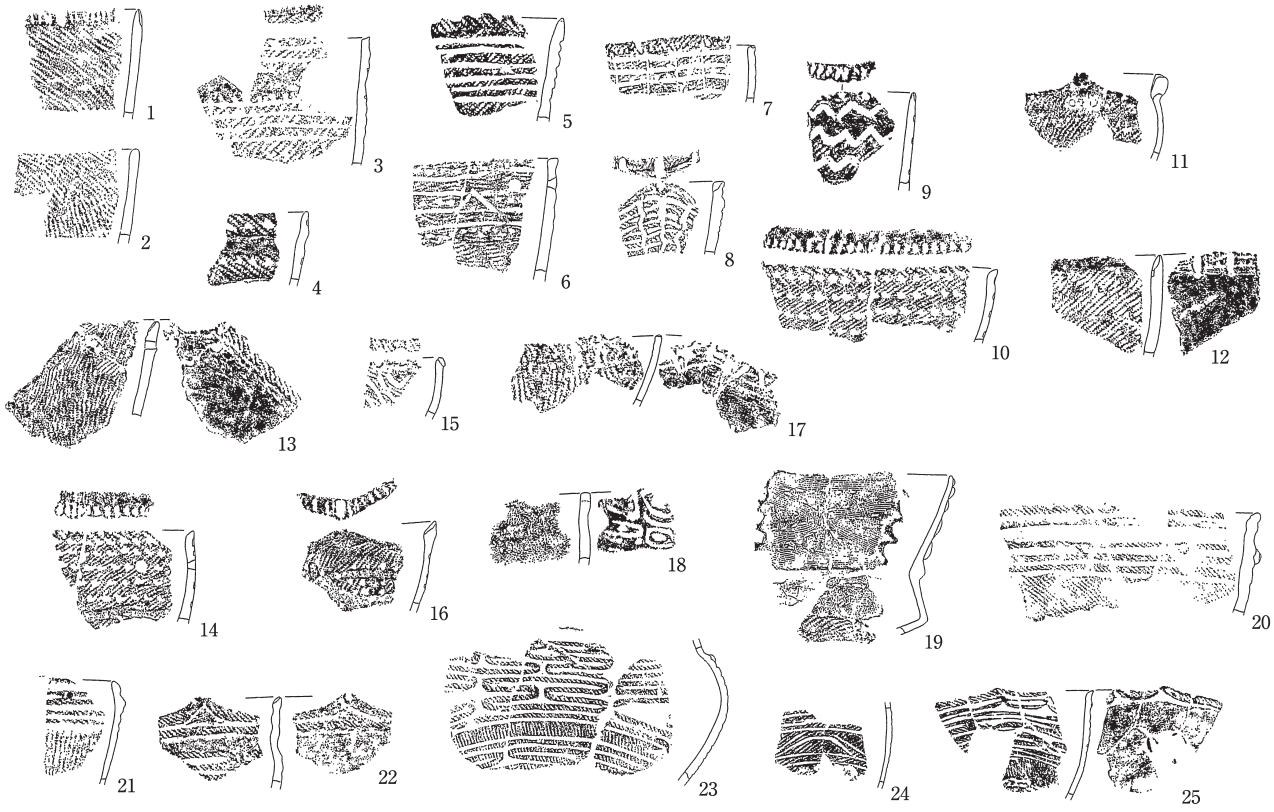
在地系の鉢は、口径・器高とも 15 cm ほどで胴部がふくらみ口縁部がわずかに内湾気味になるもの（①）と器壁はほぼまっすぐに外傾するかわずかにふくらみ、口唇上の向かい合う位置の突起の下 2 cm ほどの部分に貫通孔が穿たれているもの(②)、口縁部がやや外反する器形のものがあり、最後の器形のものは地文の縄文のみ施されるもの（③）と口縁部に文様が施文されるものもある(④)。「下層資料」で見られた、胴部がややふくらみ、口縁部がやや外反する器形で、器面全体に 2 〜 3 段の文様帯が配される（⑤）ものは消滅する。

在地系の浅鉢は、器面に地文の縄文だけのもの（①、②）は「下層資料」に引き続き存在し、その内容に変化はない。器面に文様を描くもの（③、④）は少なくなる。そして、器面は地文の縄文のみで口縁部内面に文様を施すもの（⑤、⑥）が顕著になる。

### 2-3-2. タンネトウ遺跡Ａ発掘区（長沼町）の土器群構成の検討

タンネトウＬ式の標識資料であるタンネトウ遺跡Ａ発掘区自体の資料(図 11)の土器群構成を検討する。(図 12)

在地系の深鉢形において、⑦（平行沈線文）の個体数の多さと⑨(円弧文)を欠くこと、⑩(蛇行線文)、⑪(波状線文)、⑫(刺突文)が存在すること、在地系の浅鉢形において、外面に文様を描くもの（③、④）が少なく、口縁部内面に文様を描くもの（⑤、⑥）が顕著であるこ




（在地系深鉢形③：1、2、④：3、4、⑦：5、6、⑧：7、⑩：8、⑪：9、⑫：10、
在地系鉢形④：11、在地系浅鉢形①：12、②：13、③：14、15、④：16、⑤：17、⑥：18、
在地系舟形：19、類大洞系深鉢形：20、類大洞系浅鉢形：21、22、類大洞系壺形：23、大洞系浅鉢形：24、25）

図 11　タンネトウ遺跡 A 発掘区出土土器タイプ

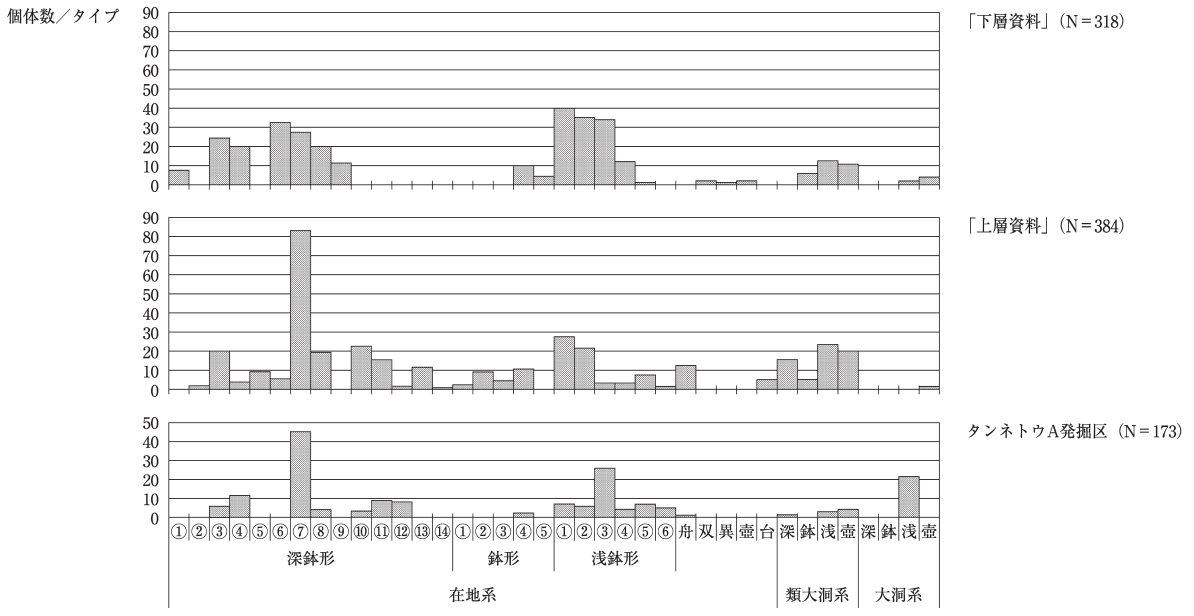



図 12 「下層資料」と「上層資料」とタンネトウ遺跡 A 発掘区の土器群構成

と、在地系の舟形をもち、双口形や異形を欠くことから、「上層資料」つまり駒里上層式に相当するとできる。また、タンネトウ遺跡A発掘区の資料の特徴として在地系深鉢形⑫（刺突文）タイプの多さが挙げられる。また、在地系浅鉢形③が26個体と多く、このうち25個体は器面に刺突文が描かれているものである。ほかのタイプにおいても文様要素として刺突を伴うものが多い。なお刺突はほとんどが縄文原体の端部によるものである。

タンネトウL式設定の標識資料であるタンネトウA発掘区の資料自体はほぼ「上層資料」に相当する。研究史において述べたが、タンネトウL式について、Ta-c層の上層、つまり駒里上層式の土器群に相当する時期に限定するか、Ta-c層を挟んだ上下層を併せた時期（駒里下層式の土器群に相当する時期と駒里上層式の土器群の土器群に相当する時期を併せた時期）の土器型式とするのか、研究者によって異なった。混乱を避けるため、タンネトウL式という名称は使わず、駒里下層式・駒里上層式を使う方が良いと思われる。

ただし、駒里下層式・駒里上層式という土器型式の細分が妥当であるのか、それぞれの土器群の地域的分布を示していないという問題があり、課題としたい。

### 2-3-3．K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 14 d 層出土土器の土器群構成の検討

#### 2-3-3-1．出土資料の検討

K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 14 d 層出土土器のうち、遺構内出土・遺構外出土を合わせ、破片が微小で不明なものを除いた口縁部資料と壺形土器の胴部破片2点を加えた200個体を対象にした。

先に設定した土器群構成単位（タイプ）ごとに資料を検討する。表2にタイプごとの個体数を載せている。

##### 2-3-3-1-1．在地系土器

数量的に主体（196個体）であり、大洞式土器の要素を持たないと判断し「在地系土器」とした。1～4 mmの角張った砂粒を多く含んだ粘土を用い、粘土紐を積み上げ、成形する。内面調整は主に水平方向のナデ痕が残る。深鉢・鉢・浅鉢の器形は、胴部にわずかなふくらみをもち、屈曲しない。波状口縁を呈するものや口唇上に突起をもつものは深鉢においては少ないが、浅鉢においては4割ほどである。深鉢の半分ほどには口縁部に、棒状工具や半截竹管の背によって引いた沈線（幅4 mm、深さ1 mm、内部に施文工具を引きずった筋が残る）、縄文原体の回転施文（条に沿って10 mmの間に節が4～6個の割合）、縄文原体による側面圧痕、棒状工具や半截竹管や縄端による刺突（径3～5 mm）によって、平行縄線文、円弧文、刺突列で区画した無文帯などの文様を施す。浅鉢の口縁部に文様を描くものは少なく、全て口縁部に一条の沈線（幅4 mm、深さ1 mm、内部に筋が残る）を施す文様である。外面の施文の後に、口唇上に施文される。縄文原体の回転施文や側面圧痕、棒状工具や縄文原体の側面圧痕によるキザミ、棒状工具や縄端による刺突を組み合わせて施文される。

深鉢形①（突起隆帯）……図13-1

図13-1の個体は、波状口縁を呈し波頂部の内面10 mm程から外面50 mmほどかぶさるように貼付帯が垂下し先細る。隆帯（貼付帯）の両側の口唇上には棒状工具によると思われる刻みがある。外面の隆帯上には縄文原体RLによる5つの刻みが施されている。器面には縄文原体RLによる回転施文がなされている。内面には水平方向のナデの痕と多数の指頭圧痕が見られる。2個体出土。

深鉢形②（隆帯）……図13-2

図13-2の個体は、右上がりのつまみ出し隆帯が口唇部付近まで達している。隆帯の両側に沿うように縄文原体LRの端部による刺突が並ぶ。口縁部内面に縄文原体LRによる回転施文がなされている。1個体出土。

深鉢形③（縄文）……図13-3

図13-3の個体は、器面に縄文原体RLによる回転施文がなされる。口唇上には縄文原体Lによる側面圧痕が二条めぐり、外端に刻みが加えられている。内面には水平方向のナデの痕が見られる。

全体では、器面に回転施文される縄文原体はRLが28個体、LRが24個体である。いずれも縄文原体を水平・垂直に回転施文し条が斜走するものが多く、斜位に回転施文して条が水平あるいは垂直に走るものは少ない。無文のものは17個体である。全部で69個体出土。

深鉢形④（刺突列で区画される無文帯）……図13-4、5、6

図13-4の個体は、口縁部下半に爪形の刺突列で区画された無文帯を持ち、口縁部上半に円弧文が描かれる。円弧文は、水平方向の櫛歯状工具によると思われる条痕を施した後に垂直方向の条痕を施し、その後に幅3 mmほどの沈線で括弧状の文様と短沈線で円弧文を描いている。口唇上は、突起部分に縄文原体Lによる側面圧痕が三条めぐり、外端に刻みが加えられている。また、無文帯の部分がゆるやかに内側に張る器形である。

図13-5の個体は、口縁部が上から、上下端が円形の刺突列で区画され水平方向の条痕の上に括弧状の沈線と短沈線で円弧文が描かれ、その下段はその上下端を円形の

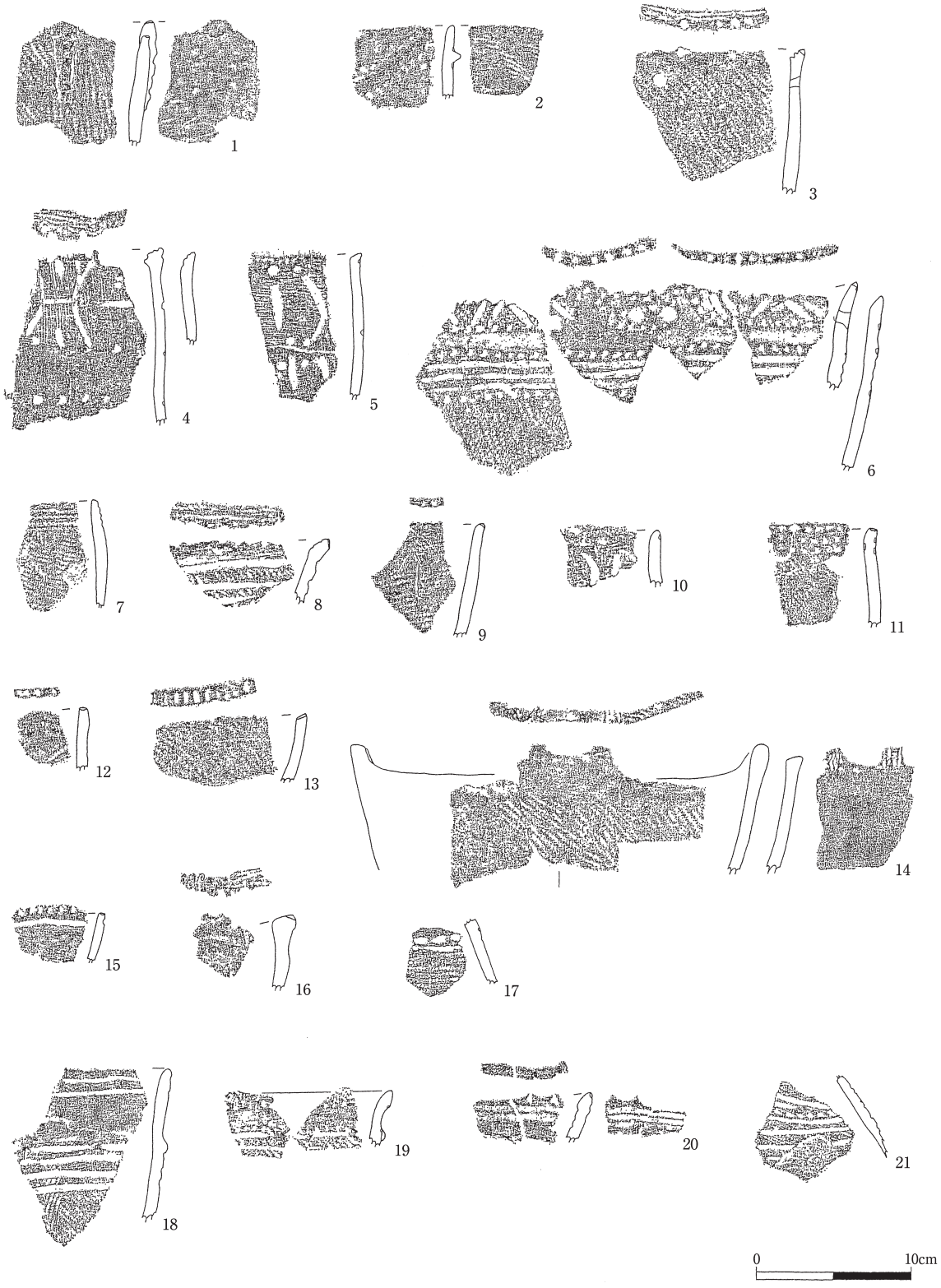



図 13　K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 14 d 層出土土器タイプ

刺突列で区画された無文帯が作られ、その下段には下地に条痕を持たずに円弧文が描かれている。口唇上には外端に刻みが加えられている。

図 13-6 の個体は、口唇上に突起を有し、口唇直下から、幅 5 mm ほどの短沈線が斜位に二条ずつ交互に並べられている。その下段に上下端を爪形の刺突列で区画された無文帯があり、口唇上の突起部で上段に貫入している。さらにその下段には上下端を爪形の刺突列で区画されて三条の平行沈線文が描かれている。この沈線も幅 5 mm ほどで沈線内部には筋が残っている。器面には地文として縄文原体 RLR が回転施文されている。口唇部の断面形は切り出し形で端部に刻みが加えられている。内面には水平方向のナデの痕が見られる。また、補修孔が穿たれている。

ほかの個体は、 1 個体が平行沈線文の下段に無文帯をもつもので、残りは無文帯のみかその部分のみの資料である。13 個体出土。

深鉢形⑥ （平行縄線文）……図 13-7

図 13-7 の個体は、地文として縄文原体 LR を回転施文し、口縁部には縄文原体 LR の側面圧痕が 4 条施され、平行縄線文を描いている。口唇上は磨耗していて不明。内面は垂直方向のナデを全体にした後で口縁部内面に水平方向のナデをした痕が見られる。

全体の縄文原体の側面圧痕は、LR のものが 7 点、RL のものが 6 点である。全部で 13 個体出土。

深鉢形⑦ （平行沈線文）……図 13-8

図 13-8 の個体は、地文として縄文原体 RL を回転施文し、口縁部に 3 条の沈線がめぐり平行沈線文を描いている。沈線内部には筋が見られる。口唇上には、縄文原体 L の側面圧痕が二条めぐり、外端に刻みが加えられている。内面には水平方向のナデの痕が見られる。沈線はこの個体のようにしっかりとしたものと、磨耗したような薄い沈線のものが半々である。14 個体出土。

深鉢形⑧ （格子目文）……図 13-9

図 13-9 の個体は、地文として縄文原体 LR が回転施文され、口縁部にひっかいたような細い二条ずつの斜位の沈線が施されている。口唇上には外端に刻みが加えられ、内面には水平方向のナデの痕が見られる。

ほかに口唇部直下の外面に斜位の沈線（幅 4 mm 深さ 1 mm、沈線内部に筋が残る）が並び、そのような斜位の沈線が数本ずつ向きを変えて交差し、格子目状文になると思われるものが 1 個体ある。全部で 2 個体出土。

深鉢形⑨ （円弧文）……図 13-10

図 13-10 の個体は、口唇直下に爪形の刺突列が並び、それを上端として口縁部に水平方向の条痕に重ねて円弧文が描かれる。さらに括弧状に囲まれた部分には棒状工具による刺突で埋められる。内面には水平方向のナデの痕と指頭圧痕も残る。この個体以外は条痕に円弧文を重ねるもので、刺突は伴わない。18 個体出土。

深鉢形⑫ （刺突文）……図 13-11

図 13-11 の個体は、器面に地文として縄文原体 RL が回転施文され、口縁部に二条、口唇上、口縁部内面にそれぞれ一条の爪形刺突列が施される。内面には水平方向のナデの痕が見られる。他の個体の刺突は、縄文原体の端部によるものと、棒状工具の外面からの刺突で突瘤状に内面が盛り上がるものがある。 8 個体出土。

深鉢形⑭ （菱形文）……図 13-12

図 13-12 の個体は、口縁部に縄文原体 RL を様々な方向に回転施文し、菱形状の無文部ができているようである。口唇上に突起を有し、棒状工具による刺突列が施されている。 1 個体出土。

浅鉢形① ……図 13-13

図 13-13 の個体は、器面に縄文原体 RL が回転施文され、口唇上には直交する刻みが加えられる。内面には水平方向のナデの痕が見られる。

全体では、縄文原体は RL が 12 個体、LR が 1 個体でほとんどが水平方向の回転施文である。無文のものは 16 個体である。全部で 30 個体出土。

浅鉢形② ……図 13-14

図 13-14 の個体は、器面に縄文原体 RL が回転施文され、口唇上にも同じように回転施文される。台形状の突起が二つで一組になった突起を口唇上に有し、 2 つの台形状の突起の内面には直交する縄文原体 L による側面圧痕が 3 条ずつ施されている。内面は平滑にされている。

波状口縁の波頂部の上面観が丸く肥厚しているものが多く、山形、台形の突起もある。全部で 20 個体出土。

浅鉢形③ ……図 13-15

図 13-15 の個体は、口唇直下に一条の沈線が施され、口唇上には直交する刻みが加えられる。 3 個体出土。

浅鉢形④ ……図 13-16

図 13-16 の個体は、器面に縄文原体 RL が回転施文され、口縁部に一条の沈線が施されている。口唇上に突起を持つ。 1 個体出土。

壺形 ……図 13-17

図 13-17 の個体は、器面に縄文原体 LR が回転施文され、二条の沈線の間に刺突列が並ぶ。沈線と刺突は同じ工具によって施され、両方とも内部に筋が残る。 1 個体出土。

**2-3-3-1-2．類大洞系土器**

「在地系土器」と胎土の特徴（1 ～ 4 mm の角張った砂粒を多く含む）、文様要素の沈線（幅 4 mm、深さ 1 mm、内部に施文工具を引きずった筋が残る）、縄文原体の回転施文（条に沿って 10 mm の間に節が 6 個の割合）の特徴は共通しているが、口縁部が屈曲する器形で、沈線上に瘤を有するという文様要素をもつ深鉢 2 個体と、内外面に施文され、突起部の外面にもキザミが施されている浅鉢 1 個体を「類大洞系土器」とする。

図 14 は道南の知内町湯の里 6 遺跡出土土器（湯の里 Vc 類）である（中田 1985）。福田正宏はこれらの土器群を大洞 $A_2$ 式に併行するとしている（福田 2000）。この遺跡においては聖山式土器（大洞系土器）が在地製作の土器であると考えられる。

深鉢形……図 13-18、19

図 13-18 は、内面には水平方向のナデの調整痕が残る。外面は、器壁が内側にわずかに屈曲する口縁部上半を無文帯とし、口唇直下から 2 条平行沈線を施す。口縁部下半の上端には瘤状の隆起を予め一列等間隔に作出し、その後、口縁部下半に地文の縄文を回転施文し、瘤間およびその下位に平行沈線を 3 条施している。口唇部断面形は内削ぎ状で、口唇上に縄文原体による回転施文がなされる。

図 13-19 は、内面には水平方向のナデの調整痕が残る。屈曲部の外面を無文帯にし、無文帯の上下端に瘤状の隆起を等間隔に作出し、その後地文の縄文を回転施文し、無文帯下端の瘤間およびその下位に平行沈線を施す。さらに、無文帯上下端を爪形刺突列で区画する。刺突文の径は 4 mm ほどで棒状工具を器面に対して斜めに刺突することで爪形を呈している。口唇部断面形は内削ぎ状で、口唇上に縄文原体による回転施文がなされる。2 個体出土。

聖山式土器を参照する。図 14 の 2 、5 は無文帯部分の器壁が内側に屈曲している。また無文帯直下の沈線上には瘤が並ぶ。これらの要素が共通している。沈線上の瘤については、報告書の図及び記載から判断すると、地文の縄文が無く沈線に切られていることも無いことから、最後に貼り付けたと考えられ、施文順序としては相違点である可能性がある。

浅鉢形……図 13-20

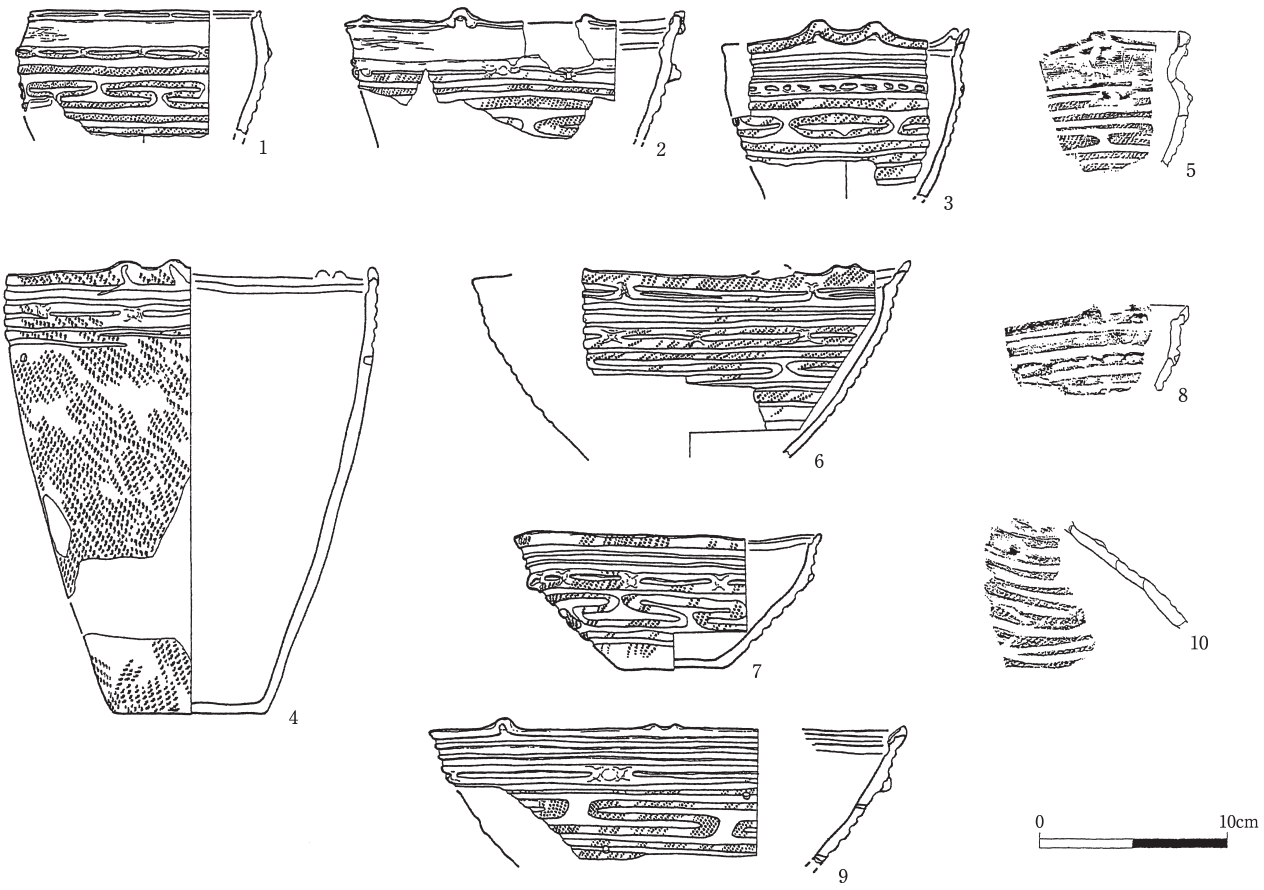



図 14　湯の里 6 遺跡出土土器

図 13-20 の個体は、山形の突起が 2 個 1 組となって口唇上の突起となっており、突起の外面にはその形状に沿って三叉状の刻みが二箇所施されている。口縁部に二条の沈線が横走し、口縁部内面にも二条の平行沈線が施されている。 1 個体出土。

聖山式土器には、 2 個 1 組の山形突起はよく見られ、突起部の外面を刻むものも存在する（図 14-2、 4 、 9 ）。また、浅鉢において、口縁部の内外面に施文されるものはよく見られる（図 14-6、 8 ）。

#### 2-3-3-1-3．大洞系土器

壺形の土器 1 個体である。胎土には 1 ～ 3 mm の砂粒が含まれるが少ない。内面は非常に平滑に調整されている。外面の文様において、地文の縄文は、条に沿って 10 mm の間に節が 8 個の割合で、沈線は幅 2 ～ 3 mm 深さ 1 mm ほどで沈線内部には引きずった痕の筋は残らない。以上のような、他の在地製作と想定した土器と比較して異質性がある、異系統の搬入土器と考えられる。

壺形……図 13-21

図 13-21 の個体は、器面に縄文原体 LR を回転施文した後、ヘラ状工具により沈線を数条横走させ、破片の上部は入組文状になっている。入組文と平行沈線の間には、刺突列が並ぶ。 1 個体出土。

湯の里 6 遺跡の図 14-10 の個体などは、点列という文様要素は無いが、沈線が入組文状になっており、地文の縄文も条に沿って 10 mm の間に節が 8 個の割合と類似している。そのため、この個体は、道南や東北地方北部か搬入されたと考えられる大洞式土器（聖山式土器）「大洞系土器」とした。

#### 2-3-3-2．土器群構成の検討

K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 14 d 層出土土器の土器群構成を検討する。タイプ別の個体数を既出資料のものとともに並べたグラフが図 15 である。

在地系の深鉢形において、④（刺突列で区画される無文帯）が存在し⑤（無文帯）を欠く点、⑥（平行縄線文）が多い点、⑨（円弧文）が存在する点、⑩（蛇行線文）⑪（波状線文）⑬（弧線文）を欠く点、在地系浅鉢形において、口縁部内面に文様が施されるもの（⑤、⑥）がほとんどない点から、「下層資料」、つまり駒里下層などの土器群に相当すると言える。

しかし、問題点として「下層資料」に存在しないはずの在地系深鉢形②（隆帯）、⑫（刺突文）、⑭（菱形文）が存在することが挙げられる。そのそれぞれについて検討する。深鉢形②（隆帯）の資料は、図 13-2 の一点である。この資料をもう一度検討すると、隆帯の両側を縄端の刺突列が並ぶという例は既出資料にも見られなかった。また、口縁部内面にも縄文原体を回転施文させる特殊な例である。深鉢形⑫（刺突列）については、「上層資料」と「下層資料」を比較すると確かに「上層資料」で

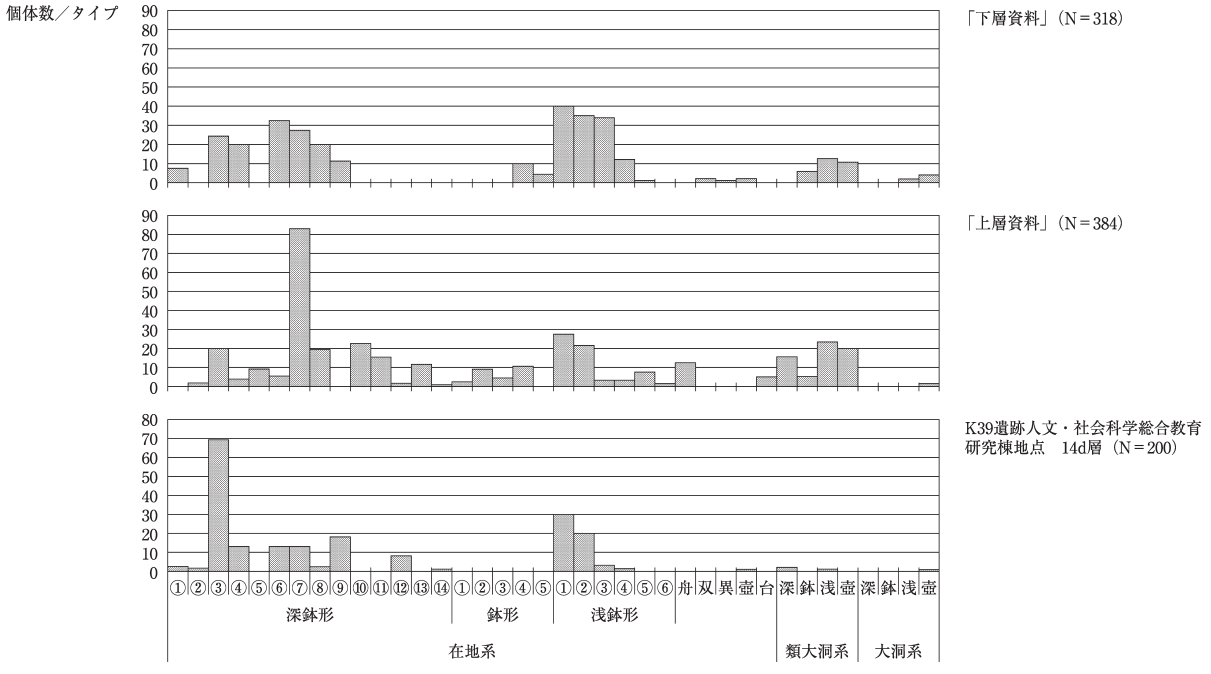



図 15 「下層資料」と「上層資料」と K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 14 d 層の土器群構成

出現するが、個々の遺跡で検討すると（表 2 ）、「上層資料」の全 10 個体のうち、駒里上層（ 2 個体）のみで、ほかのママチ遺跡などでは出土せず、分布に偏りがみられる。また、K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 14 d 層出土の資料では図 13-11 があり、この爪形の刺突という文様要素はほかのタイプ（図 13-4、 6 ）で見られる。在地系の深鉢形ではないが浅鉢形では、駒里下層において刺突文が描かれるものが存在する。従って、「下層資料」に相当する土器群の資料を増やせば深鉢形⑫タイプが存在してくる可能性がある。次に深鉢形⑭(菱形文)が存在することである。この資料は図 13-12 の 1 点である。この個体は、様々な方向に縄文原体 RL を回転施文しており、口縁部に菱形状の無文部ができている。無文部内に一部剝落の痕があり、瘤部分を避け縄文原体を回転施文させ、瘤が剝落したためかもしれない。

また、K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 14 d 層出土土器の特徴として、在地系の深鉢形③、浅鉢形①、②が著しく多いこと、鉢形や舟形・双口・異形などの器形がないことが挙げられる。一つ目は、深鉢形③、浅鉢形①、②は器面が地文の縄文のみ施されるタイプであり、既出資料が報告書掲載の個体数であり、ほかの特徴ある文様の土器よりも掲載されにくいためだと思われる。二つ目は、破片資料が多く、器形が判断しづらくなったためだと考えられる。

## Ⅵ-3　おわりに

2-1 の研究史および、2-3-2 のタンネトウ遺跡Ａ発掘区の土器群構成の検討の章で既に述べたことであるが、タンネトウＬ式と称されてきた縄文晩期後葉の土器型式名について、駒里下層式・駒里上層式という細分された土器型式名を用いることを提唱した。それぞれの土器型式の内容を確実なものにするためには、それぞれの土器群の分布を示すことが必要であり、課題としたい。

また、2-1 の研究史において、聖山式土器とタンネトウＬ式土器のそれぞれの製作技術を明らかにする必要を述べながら、今回はそこまで及ぶことができなかった。K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点 14 d 層出土土器の観察によって、数量的に主体的である土器の特徴とそこから見えてきた数個体の土器の異質性について指摘するにとどまった。何が大洞系の搬入土器で何が在地製作の大洞系土器で何が在地製作の土器であるかを実証的に説明するのが課題である。

### 参考・引用文献


石川　徹　1979「駒里遺跡」『続千歳遺跡』千歳市教育委員会：33-92.

上野秀一　1998『N 30 遺跡』札幌市文化財調査報告書 58　札幌市教育委員会.

大沼忠春　1986「北海道における縄文晩期から続縄文文化への変遷」『日本考古学協会昭和 61 年度大会　研究発表要旨』日本考古学協会：10-16.

加藤邦雄　1977「土器について」『N 199 遺跡』札幌市文化財調査報告書 XVII　札幌市教育委員会：57-71.

工藤研二　1997「縄文時代晩期の土器」『美々・美沢』北海道埋蔵文化財センター：185-186.

工藤義衛　1985「蛇行沈線文について」『文京台考古』第 4・5 号　札幌学院大学考古学研究会：11-22.

小杉　康　1987「樋沢遺跡押型文土器群の研究」『樋沢遺跡押型文遺跡調査研究報告書』岡谷市教育委員会：79-128.

鈴木　信　2002『江別市　対雁 2 遺跡(3)』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 177 集　北海道埋蔵文化財センター.

鈴木　信・西脇対名夫　2003「北海道縄文晩期後葉の土器製作技法について」『立命館大学考古学論集』Ⅲ-1　立命館大学考古学論集刊行会：123-142.

高橋正勝編　1971『柏木川』北海道文化財保護協会.

種市幸生　1983『ママチ遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 9 集　北海道埋蔵文化財センター.

中田裕香　1985『湯の里遺跡群』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 18 集　北海道埋蔵文化財センター.

中田裕香　1987『ママチ遺跡Ⅲ』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 36 集　北海道埋蔵文化財センター.

中田裕香　1998「北海道美沢川流域における縄文時代晩期中葉から後葉の土器について」『北方の考古学』野村崇先生還暦記念論集刊行会：189-198.

野村　崇・愛下　淳　1962『長沼町の歴史』下巻　長沼町：52-59.

野村　崇　1977『長沼町幌内タンネトウ遺跡の発掘調査』空知地方史研究協議会.

西脇対名夫　2003『江別市　対雁 2 遺跡(4)』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 193 集　北海道埋蔵文化財センター.

林　謙作　1981「縄文晩期の土器　北海道」『縄文土器大成 4　晩期』講談社：137-139.

福田正宏　2000「北部亀ヶ岡式土器としての聖山式土器」『古代』108 早稲田大学考古学会：129-158.

福田正宏　2004「縄文文化後・晩期」『北海道考古学』第 40 輯　北海道考古学会：49-63.

森田知忠　1977「Ⅶ　美々 4 遺跡」『美沢川流域の遺跡群Ⅰ』北海道教育委員会：103-194.

吉崎昌一　1965「Ⅱ縄文文化の発展と地域性　1 北海道」『日本の考古学Ⅱ　縄文時代』河出書房：30-63.